

戸田先生のご命日に思う「教学要綱」への疑問

2025年4月2日

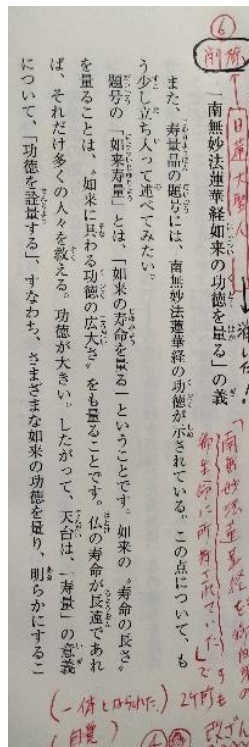
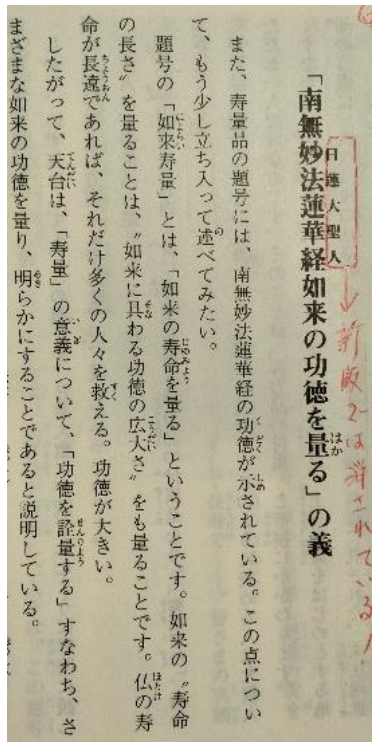
―戸田先生のご指導にも違背の「新版 法華経 方便品・自我偈講義」を読んで―

創価高校・大学4期 岡斉修

本日、**戸田城聖先生**のご命日、謹んで追善回向、報恩感謝申し上げます。

私は、1月2日、拙文―**池田先生**のご生誕日に思う―「教学要綱」への疑問―先生の
ご指導を30箇所変更の「**新版 法華経 方便品・自我偈講義**」他、を読んで―を記しま
した。 https://drive.google.com/file/d/1XTGPMAlHQuA9JeX_qB-yDyuBTL8u4zxn/view

今回の拙文の目的は、「**新版**」が**戸田先生**のご指導にも違背、**久遠元初自受用身と人法一箇の御本尊**を否定、また、「教学要綱」が**寿量品**での**釈尊**を「**永遠の仏**」と4回も記したこと(27-29頁)は、**結論、日蓮大聖人を否定した勤行(方便品・寿量品読誦と唱題)になってしまうのだ**と、皆様にも明示することです。寿量品を**釈迦本仏論**にしたことは、「教学要綱」最大の誤り、**邪義の言質**ですので破折します。(本稿33頁から38頁で詳述)



(本稿10頁で詳述)

「**新版**」の削除の中で一番酷いです。左「**法華経 方便品・寿量品講義**」2(原本)の26頁、小題の添え書きにあった「**日蓮大聖人**」が、右「**新版**」186頁では削除です！これは、**人法一箇**、そして、**日蓮大聖人を根源仏とすることを否定しています！**なぜ、削除するのですか？これでは、**池田先生のご教示の改竄、不知恩、師敵対です！！大聖人様が許されません！！** よって、私は、大聖人様と三代会長の正義を護るためにこの拙文を記しました。



戸田城聖全集1－8巻

私は、1月2日以降、戸田先生への恋慕が募り、**戸田城聖全集**（全9巻、1－8が講義、論文、巻頭言、講演、質問会、小説等で、9巻は指導算術）を再読しました。

それは、先生が日蓮仏法を縦横無尽に語る慈悲と希望の講義で、日蓮仏法の正義を再確認できる歓喜の日々でした。特に第五巻「**方便品寿量品講義**」を熟読しました。

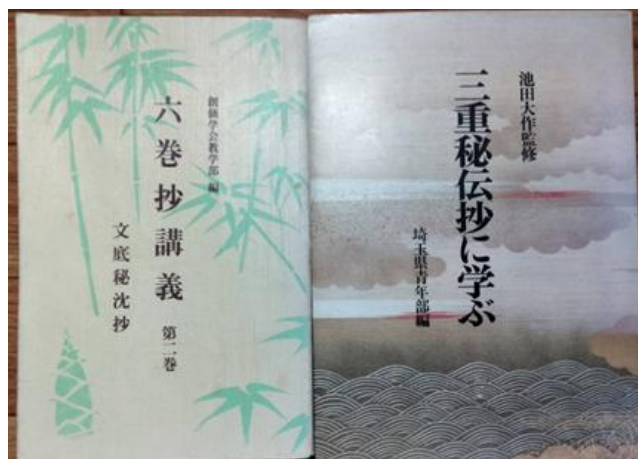
池田先生は旧版の法華経講義を出版するにあたり、次のように記されています。一方便品・寿量品の講義といえは、戸田先生が会長就任以来、七年にわたって「一級講義」として繰り返し行ってくださった、懐かしい思い出である。

先生は、釈尊・天台の立場からの「**文上**の読み方」と、日蓮大聖人の御立場からの「**文底**の読み方」を立てわけられたうえで、末法における正しい法華経の読み方をじつにわかりやすく、明快地教えてくださった。

単なる理論的説明ではなく、一人一人を納得させ、それをバネにして苦悩をはね返させ、広々とした境涯を教えたい、人生の大いなる道を開かせてあげたい－こういう慈愛と智慧の名講義であった。

戸田先生の講義ですべて尽くされているが、私は弟子として、先生の講義を原点としながら、現在の時代・社会に、より即した形で、もう一度、わかりやすく語ってまいりたい（**池田大作**全集 85 巻, われらは”人間として”輝く, p. 404-405）－と。

私は、池田先生の上記ご指導を拝し、もう一度、戸田先生の御書拝読における指導を心肝に染めるべきと思い、戸田城聖全集の下記ご指導も拝受しました。



日寛上人の「六巻抄」の講義録

「戸田城聖全集」第一巻、巻頭言編 133、134 頁の「御書の拝読について」には 一日寛上人の御抄を拝見するのに、それが、三重秘伝抄にせよ、文底秘沈抄にせよ、末法相応抄にせよ、当流行事抄にせよ、(以上は六巻抄の四つ) 観心本尊抄の文段にせよ、みな五重の相対を明らかにし、久遠元初の自受用身即日蓮大聖人なることを明かそうとしていられる。

天台と、蓮祖聖人との仏教観の相違を明らかにし、種熟脱も強く論ぜられ、末法適時の仏法は、蓮祖聖人の仏法であらねばならぬと強調せられている。(中略)日寛上人ほど正しく精密に、しかも忠実に、大聖人の御書をお読みになった方はいないのである。このゆえに、未来の末弟にこの文をとどめるとか、広宣流布の日のために、これを書きおくと御文書が、諸所に拝読せられるのである。

いま広宣流布はなほだ近きにありと、吾人は断ずるのであるが、この時にあたって、われわれが御書を拝読するには、いかようにして、拝読すべきであろうか。その拝読の指導を、日寛上人の読み方に受けなければならないと思う。

また御書を教うるのも、その心がまえをもって指導すべきであろう。初代の会長も、常に口グセのごとくおおせられたのは教授主義ではなく、指導主義であった。われらは初代会長の指導主義を遵奉し、日寛上人の御書拝読の法に指導をうけ、後進に対して、またまた、そのごとく指導しなければならぬ。一と記されています。

また、同じく戸田城聖全集第一巻 254 頁の「法華經を読む心がまえ」には、

一日蓮大聖人の法門は、いまだ、だれびともいわざる寿量文底の南無妙法蓮華經、すなわち文底下種の法門である。末法の今日、法華經を読まんとする者は、この点に深く留意し、末法適時の南無妙法蓮華經を根源として、依義判文の原理により、これを読破しなければならぬ。(中略)されば、予の講義せんとするものは、「御義口伝」「本因妙抄」「百六箇抄」等の秘書を基として、日寛上人の依義判文の流れを汲みて講ぜんとするものである。一と記されています。

すなわち、戸田先生は御書、法華經、そして寿量品の文底を拝するには、日寛上人の御教示を受け、「御義口伝」「本因妙抄」「百六箇抄」等の相伝書を基にされると、ご指導されているのです。そして、池田先生も、この戸田先生のご指導通りに、「方便品・寿量品講義」をされました。私は、これまでの拝読の姿勢を反省しました。そして、この戸田・池田両先生のご指導をもとに、もう一度、「新版 法華經 方便品・自我偈講義」を読み直しました。すると、1月2日の時点では気づかない、「新版」の新たな変更、誤りを再発見し、これは、再度、皆様にお伝えすべきと思い、この度の拙文へと至りました。

「新版」との比較をするため「戸田城聖全集」第五巻「方便品・寿量品講義」を拝読、その甚深の意義、解釈を学びました。その結果、結論として「新版」は358頁の記述で、寿量品の根本義である「良医」を上行菩薩の日蓮大聖人とし、文上からの限定としていて、これは戸田・池田両先生の本意ではなく、用いることは出来ません。

そして、1月2日の拙文に記した池田先生の原本「講義」と「新版」との比較で抽出した30の変更、削除の内容を、未だお読みでない方もおられると思い、内容を分類して再掲載(4～11頁)、その後、その途中に新たな変更、削除、誤りを補講、追記(12～17頁)、さらにその上で、今回、以下5つの新たな論点で論述しました。

(新たな論点)

1. 戸田先生の法華經講義のご指導から、先生の寿量品講義は内証の寿量品、即ち、日蓮大聖人の己心に証得された寿量品であることと、「新版」に記述された寿量品の記述の誤りを、戸田先生の講義から再度、明確に破折すること。(特に根本である「良医」が釈迦になっている誤りへの破折)

2. 戸田先生の法華經講義は相伝書の「御義口伝」と「本因妙抄」と「百六箇抄」を根本としていることを示し、それらに反し「教学要綱」と、それを支持する男子部教室が、相伝を全く無視することへの破折。

3.「若き日の日記」(現在、大白蓮華に連載中)より池田先生が相伝書を研鑽されたことをご紹介します。2.と同じく、それらに反し「教学要綱」と、それを支持する男子部教室が相伝を全く無視することへの破折。

4.「教学要綱」の最大の誤り2つ(①28 頁で、如来寿量品における釈尊を4回も「永遠の仏」と記した誤り、②78, 79 頁で、日蓮本仏論の完全否定となる大妄語、即ち、御本尊の相貌について「寿量の仏」を釈尊とした誤り) さらに、私が当初から持つ以下、主要な5つの疑問、誤りに対し、戸田先生の講義、池田先生のご指導等より破折する事。

①. 釈尊の”成仏した本因”を明かさないこと。

②. 「日蓮＝久遠元初自受用報身如来＝南無妙法蓮華經＝人法一箇の御本尊」を記さず、大聖人は単に釈尊から託された「南無妙法蓮華經」を弘める菩薩(91頁)とすること。

③. 「人本尊」と「法本尊」、御本尊の相貌の根本義「人法一箇」を一切記さないこと。

④. 大聖人の竜の口法難での「発迹顕本」の真義を論述しないこと。

⑤. 三宝の法宝は「御本尊」を削除して「南無妙法蓮華經」に変更(156頁)、僧宝は日興上人を削除して「創価学会」に変更(156頁)、一大秘法も「本門の本尊」を突如「南無妙法蓮華經」に変更したこと(158頁)。また、それ等全てに理由がないこと。

5. まとめと所感

続きまして、1. 2拙文でご紹介した「新版」30個の変更、削除を、内容ごとに分類しましたのでご紹介します。なお、1～8は方便品講義、9 から24は寿量品講義1, 25～30 は寿量品講義 2 に記された内容です。

1) 文底否定 法華經と題目の同一化

1.「講義」17 頁には一方便品の講義に当たっての小題「万人に開かれた文底仏法」のところに— 日蓮大聖人が法華經を読まれるのは、釈尊が説いた法華經をそのまま読むのではなくて、末法の御本仏という御境界で『予が読むところの迹門』『予が内証の寿量品』とおおせられ、文底からの読み方なのであります(『戸田城聖全集』5)—と。それが「新版」21 頁では—戸田先生の引用を含め、最も重要なこの指導が完全に削除

2.「講義」18 頁には一小題「文底とは大智慧の活釈・民衆訳」のところに—私どもが勤行の際に方便品・寿量品(自我偈)を読むのは、**正像時代の法華経ではなく、大聖人の南無妙法蓮華經の立場から読んでいる**わけです。—と。それが「新版」22 頁では、**小題も含め完全に削除**

3.「講義」20 頁には一小題「読誦する功德」のところに—この「正行」と「助行」の関係について、日寛上人は、米やソバを食べる(正行)時に、塩や酢が調味料として使われて味を助ける(助行)ことに譬えておられる(六卷抄一九三頁)。「正行」の功德は広大です。そのうえで**「助行」は「正行」の功力を増し、促進する助縁の働きをもっている**。—と。それが、「新版」23 頁では上記が**完全に削除**。

4.「講義」22 頁~23 頁には一小題「方便品・寿量品は二十八品の根幹」のところに—ただし、当然のことながら、私たちが読誦している方便品・寿量品は、先にも述べたように、大聖人の文底の立場から見た法華経です。日寛上人は次のように説明しています。すなわち**方便品を読むのは「所破・借文」のため、寿量品を読むのは「所破・所用」のためである**、とされています(六卷抄 194 頁、204 頁)。

簡潔に言うと、大聖人の仏法の立場から、「釈尊の法華経は末法には功力がない」と破折する読み方かが「所破」です。そして、「法華経が御本尊の偉大さを証明している」として讃嘆する読み方が「借文」と「所用」にあたります。なぜ、こう説明されるかについては厳密な論議がありますが、ここでは、私たちの方便品・寿量品読誦は、あくまで大聖人の立場から法華経を読誦していることを確認しておくにとどめたい。—と。それが、「新版」25 頁では、**上記が完全に削除**。

8.「講義」128 頁には—戸田先生は文底の立場から、この方便品の文が「御本尊の境涯」を説いていることを教えられました。—**南無妙法蓮華經の境涯は、法華経迹門の仏とは天地雲泥ほどの恐ろしい違いがある**。我々は、なんの苦勞もなく「無上の宝聚を求めずして自ずから得たのだ」—と。それが「新版」111 頁では、上記—文底の立場から、この方便品の文が「御本尊の境涯」を説いていることを教えられました。—が**削除**—戸田先生は、こう教えられました。—だけ。

14.「講義」31 頁には一小題「本門と迹門」のところに—迹門と本門の関係は、例えていえば、迹門は「天の月が水に映った影(水月)」であり、本門は「本体である天月」にあたる。なお、文底の立場からいえば、日蓮大聖人が御本仏であり、久遠実成の釈尊も迹仏となる。—と。それが、「新版」190 頁では、この赤字の根本義「**なお、文底の立場からいえば、日蓮大聖人が御本仏であり、久遠実成の釈尊も迹仏となる。**」を**完全削除**。

15.「講義」41 頁には—「三請不止」の部分を文底から読むならば、御本仏・日蓮大聖人が、南無妙法蓮華經という、「仏の真実の語」を信解し、実践するよう、弟子たちに誠められた經文といえます。—と。それが、「新版」195 頁では—「三請不止」の部分を私たちの立場から読むならば—に変更。

22.「講義」109~110 頁にある小題「仏法は最高の「健康」「長寿」の法」が「新版」248 頁で、小題ごと、全文削除。(内容は池田先生の文底の立場からの読み方です。詳細は省略します。)

28.「講義」155 頁には—小題「苦海の社会を常樂の太陽が照らす」のところで—文底から言えば、つねに住する不滅の仏とは、御本尊、南無妙法蓮華經如来です。その常住の仏が出現して説く無上の法とは、南無妙法蓮華經にほかなりません。私たちが不惜の信心で唱える題目の声は、そのまま常住の仏が無上の法を説く声となるのです。それは、功德の実証などを通じて、妙法の力を私たちに教えてくれます。—と。それが、「新版」410 頁では、上記、寿量品の最重要講義が完全削除。

文底(久遠元初)否定

16.「講義」46 頁には—小題「久遠とは「はたらかさずつくろわず」のところに—「久遠」について、大聖人は仰せです。「此の品の所詮は久遠実成なり久遠とは、はたらかさずつくろわず、もとの儘と云う義なり」と。これは久遠の文底の意義です。これを文上の久遠と分けて「久遠元初」ともいいます。この久遠の意味は、御文に仰せのように、“もとのまま”ということです。—と。それが、「新版」200 頁で は—上記の赤字を削除して、「久遠」について、大聖人は仰せです。「此の品の所詮は久遠実成なり久遠とは、はたらかさず・つくろわず・もとの儘と云う義なり」と。この久遠の意味は御文に仰せのように “もとのまま”ということです。— へ、削除、変更

さらに、「講義」同頁には—「久遠」とは十界具足の常住の生命のことであり、十界常住の南無妙法蓮華經の御本尊です。「実成」とは、私たち一人一人の内に具わっている御本尊が現れ、その功德が開かれてくるということです。これが文底の久遠実成です。これを文上の久遠実成と明確に区別してそして、「久遠元初」とも言うのです。—と。それが、「新版」同頁では—「久遠」とは十界具足の常住の生命のことであり、それは「永遠の法」である南無妙法蓮華經と一体です。

「実成」とは、私たち一人一人の内に具わる南無妙法蓮華經の働き、功德が、わが身に開かれ現れてくるということです。これが**文底の久遠実成**です。これを**文上の久遠実成と明確に区別して「久遠元初」と表現することがあります。**-に変更。

2)御本仏を悪しく敬う捉え方

5.「講義」74 頁には—小題「御本仏に連なる誉れ」とあります。それが、「**新版**」68 頁では、この小題が「**末法の御本仏に連なる誉れ**」に変更。末法だけの限定です。

(釈迦の弟子日蓮)

10.「講義」16 頁には—小題「だれが末法に弘めるか」のところに—日蓮大聖人は地涌の菩薩の上首・上行菩薩の再誕として末法の民衆を救うために寿量品の文底に秘沈された南無妙法蓮華經を御自身の魂とし、その御生命を御本尊として顕されたのです。—と。それが、「**新版**」179 頁では、— 日蓮大聖人は、自らが地涌の菩薩の上首・上行菩薩に**当たるとの御自覚から—**に。寿量品に入った途端、「**新版**」は**日蓮大聖人に対し、「上行菩薩に当たるとの御自覚」とし、以後、この解釈の繰り返しです。**

(日蓮大菩薩)

19.「講義」の 65~66 頁には—「開目抄」に「日蓮といふし者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ、此れは魂魄・佐土の国にいたりて」—日蓮と言っていた者は去年(文永八年)九月十二日の子丑の時(夜半すぎ・)に凡身の頸を刎ねられた。これは、魂魄が佐渡の国に至ったのである—と。この一節について、日寛上人は次のように述べられている。—「この文の元意は、蓮祖大聖は名字凡夫の御身の当体、全くこれ久遠元初の自受用身と成り給い、内証真身の成道を唱え、末法下種の本仏と顕れたまう明文なり」(「開目抄文段」文段集一九二頁)と。すなわち、凡夫の身のうえに久遠元初の自受用身の生命を顕された—これが、大聖人の「発迹顕本」です。大聖人の御内証の本地—それは、久遠元初の自受用身であられる。自受用身とは「ほしいままにうけもちいるみ」(御書 759 頁)です。—と。それが「**新版**」216 頁では—**上記の赤字下線が完全に削除。**

その後—すなわち、凡夫の身のうえに久遠元初の根源の仏の生命を顕わされた—これが、大聖人の「発迹顕本」です。大聖人は、根源の妙法の力用を自由自在に受け用いる宇宙大の境涯を示されたのです。—に**変更。**

20.「講義」86 頁には一小題「五百塵点劫は始成の成仏觀を打破」のところで一大聖人は「觀心本尊抄」で、妙法を受持するわれらの「己心の釈尊」は、「無始の古仏」であると仰せです(御書二四七頁)。この文底の趣旨を明らかにしたのが「久遠元初」です。「久遠元初」とは、生命の本源、大宇宙の本源という意味です。その本源の生命こそ久遠元初自受用身如来の生命であり、即南無妙法蓮華經です。「久遠とは南無妙法蓮華經なり」(御書 759 頁)と仰せです。—と。それが「新版」23 1 頁では—上述の赤字下線が完全削除。

21.「講義」93 頁には一小題「この世界こそ、わが使命の仏国土」のところで一文底から言えば、この”舞台”で活躍するのは、久遠実成の釈尊だけではありません。すでに述べたように、久遠実成を“元初の生命に立ち返ること”と、とらえるのが文底の意です。—と。それが、「新版」237 頁では、小題の後にあるべき上記が完全削除。

27.「講義」92 頁には一大聖人御自身、一往・文上の御立場では、この地涌の菩薩のリーダーである上行菩薩の再誕として妙法弘通に挑まれました。しかし再往・文底では、大聖人こそ末法万年の民衆を救う南無妙法蓮華經の「大良薬」を残された御本仏であられることは言うまでもありません。—と。

それが、「新版」358 頁では—「一往・文上の御立場では」と「再誕」を削除し、大聖人御自身、この地涌の菩薩のリーダーである上行菩薩との御自覚で妙法弘通に挑まれました。(中略)さらに「しかし、再応・文底では」を削除し、大聖人こそ、末法万年の民衆を救う南無妙法蓮華經の「大良薬」を残された御本仏と拝しています、—に変更。

3) 単法本尊 人本尊否定の悪影響(後に説明)

6.「講義」77 頁には一日顕宗の権威主義は、法華經の心が何もわかっていない証拠なのです。(中略)日蓮大聖人は、様々な御書で、三大秘法の御本尊を「未曾有の大曼荼羅」と仰せです。—と。それが、「新版」71 頁では—上記の、日顕宗の権威主義は、法華經の心が何もわかっていない証拠なのです—に変更。

9.「講義」13 頁には—ゆえに大聖人は「妙法蓮華經こそ本仏」(1358 頁)であると述べられています。そして、この文底の立場から「如来寿量品」の「如来」とは「南無妙法蓮華經如来」、すなわち大聖人御自身であると宣言されているのです。—と。それが、「新版」176 頁で—「如来寿量品」の「如来」とは「南無妙法蓮華經如来」、すなわち南無妙法蓮華經と一体の仏の生命のことであると宣言—に変更。

12.「講義」25.26 頁には—小題「寿量品の題号の意義」のところに—日蓮大聖人は、この南無妙法蓮華經を御自身の御生命に所持されていた。そして、ひとまず上行菩薩の再誕としてのお姿をあらわし、この妙法を末法の衆生のために弘められたのです。このゆえに、大聖人は寿量品の題号を「身に当る大事」とされたのです。」—と。それが「新版」186 頁では—日蓮大聖人は、この南無妙法蓮華經と一体となられた。そして、上行菩薩としての自覚を示され—に変更。

13.「講義」26～28頁には—小題「南無妙法蓮華經の功德を量る」のところに—戸田先生も「ここに南無という二字をおつけになっただけで、如来という二文字の読み方が、ぜんぜん変わってくる」『戸田城聖全集』(5)と強調されていた。寿量品の題号を「南無妙法蓮華經如来寿量品」と読むとき、「文底の仏である「南無妙法蓮華經如来」の功德を量る」という意味になるのです。—と。それが、「新版」186頁では—まず、題号の横に添え書きで「日蓮大聖人」と書かれているのを削除、そして「文底の仏である」を削除。大聖人が「此の品の題目は日蓮が身に当る大事なり」と仰せになっているのも、御自身が文底の南無妙法蓮華經如来であられるからです。—と。それが、「新版」187 頁では—御自身が(文底の-を削除して)—南無妙法蓮華經と一体だからです—に変更。「講義」の続き—また、この文底の仏を「無作の三身」とも言います。—と。それが「新版」187 頁では—また、ありのままの仏である「末法の仏」を「無作の三身」とも言います。—に変更。

17.「講義」51 頁には—日蓮大聖人は、御自身の南無妙法蓮華經如来の生命を御本尊として顕されました。まさに、「如来秘密神通之力」とは、御本尊のことです。—と。それが、「新版」204 頁では —末法の御本仏・日蓮大聖人は、(御自身の、を削除)南無妙法蓮華經(如来削除)と一体となったご自身の生命を御本尊として顕わされました。—に変更。

18.「講義」61 頁には—小題「久遠元初とは“生命根源の時”」のところで—大聖人は、御自身の生命に具わっているこの成仏の根本法が南無妙法蓮華經であり、御自身が南無妙法蓮華經如来であると明確にお説きになり、その大生命を御本尊として顕されて、末法の一切の人々に与えてくださったのです。—と。それが、「新版」211～212 頁では—大聖人は、御自身の生命に具わっているこの成仏の根本法が南無妙法蓮華經であり、さらに御自身が南無妙法蓮華經と一体であると明確にお説きになり、その大生命を御本尊として顕されて、末法の一切の人々に与えてくださったのです。—と、「如来」を削除して変更

23.「講義」136 頁には一文底から言えば、「如実知見」している「如来」とは日蓮大聖人です。

大聖人こそ、久遠元初から常住する慈悲と智慧の生命—寿量品の文底に秘沈されている南無妙法蓮華經の大生命の当体なのです。そして、私たちが拝する御本尊は、大聖人の慈悲と智慧の御生命そのものです。—と。それが「新版」268 頁では寿量品の根本義である上記が完全削除。

24.「講義」45 頁にある—小題の「一身即三身・三身即一身」の仏とは日蓮大聖人—のところ
で、一文底から言えば「一身即三身・三身即一身」の仏とは南無妙法蓮華經如来すなわち日蓮大聖人です。—と。それが、「新版」274 頁では、ここでも、**小題も含め上記、全文が削除。**

25(最重要事項).「講義」20 頁から 22 頁の、小題である「末法の本尊は「本因妙の釈尊」
=大聖人—と、その全文の 25 にわたる記述があります。(以下に掲載)—と。それが、「新版」297
頁では—**小題が消去され、その後一本因妙の心は、“人間の尊厳を開く実践”にあります。この**
ことを端的に示しているの が寿量品の「我本行菩薩道」の文です。—これだけ。**池田先生の**
「講義」の以下全文を完全削除。

—「我」とは、先に述べたように、久遠において菩薩道を実践した「**凡夫の釈尊**」です。われわれと 同じ人間です。決して人間を超えた何者かではない。久遠とは生命の本源であり、生命の本源に立ち返った久遠の凡夫が「**本因妙の釈尊**」です。この「**本因妙の釈尊**」を本尊とするの
が、大聖人の仏法なのです。久遠における「本因妙の釈尊」は、すなわち末法の御本仏日蓮大聖人であられる。久遠即末法です。このことは大聖人の次の仰せから明らかです。「今日蓮が修行は久遠名字の振舞に芥爾計も違わざるなり」「久遠の釈尊の修行と今日蓮の修行とは芥子計も違わざる勝劣なり」(御書 864 頁)すなわち“今、末法における日蓮大聖人の修行は、久遠における名字凡夫の釈尊の修行と少しも変わることがない”と仰せです。名字とは名字即のことで、妙法を信受する凡夫の位をいう。日寛上人も本因妙の釈尊即大聖人、久遠即末法と拝する理由について、行位全同—「行」と「位」がまったく同じだからである、と言われている。(六巻抄八八頁)「行」は修行であり、妙法受持の実践です。また「位」とは名字凡夫の位です。つまり行位全同とは、人間として妙法を受持しぬく実践が、久遠と末法ではまったく同じであるということです。妙法を受持する「人間としての実践」が妙であり、不可思議であるといえる。そこに、成仏の本因・本果、すなわち幸福の根本原理が具わるからです。それが本因妙です。それゆえ末法においては、本因妙の釈尊即日蓮大聖人を本尊と拝すべきなのです。—と。この長文のご指導、如来寿量品第十六の最重要講義を完全削除! これはひどいです!** 11/68**

26.「講義」45 頁~46 頁には一小題「末法では唱題こそ最高の善根」のところに一文底から読めば、この仏とは、**南無妙法蓮華經如来すなわち日蓮大聖人であられることは言うまでもありません**。また、「薄徳の人」とは末法の衆生のことです。大聖人は末法のすべての衆生が「福德の人」となることを願い、方便として入滅されました。「如来難可得見」(仏にお会いすることは難しい)という道理を、御入滅によって末法の民衆に教えられたのです。そして、大聖人に、お会いすることのできないすべての民衆のために、御自身の真実の境地である南無妙法蓮華經の大生命を御本尊として顕し、遺してくださったのです。何と広大な、御本仏の大慈大悲でしょうか。したがって、「心に恋慕を懷き、仏を渴仰して、便ち善根を種ゆべし」とは、われわれ末法の衆生の姿と読むべきです。「恋慕」「渴仰」の心とは、御本尊への強き「信心」である。また「善根」とは、「御義口伝」に「善根は題目なり」とあるとおり、妙法を唱えることにほかなりません。-と。これが「新版」318 頁では、上記の**小題も含め、これまた寿量品の最重要講義が全文削除**。

4) 日興上人を悪しく敬う捉え方

7.「講義」84 頁には一大聖人の滅後にあっても、**日興上人がただ御一人立ち上がられたゆえに、大聖人の正義が護られたのです**。日興上人が沈黙されたならば、「五老僧が正義」との歴史ができてしまったでしょう。ゆえに、日興上人は厳格なまでに、五老僧の邪義を打ち破られたのです。五老僧は、大聖人の「意趣」、つまり御本仏の御真意が分からなかった。大聖人の「意趣」とは、三大秘法の御本尊を広宣流布し、末法の全民衆を幸福にするということに尽きる。五老僧は、この三大秘法を顕された大聖人の御心を見失ってしまった。

日興上人ただ御一人が、大聖人に常随給仕され、ともに難を忍ばれ、師の仰せのままに果敢に弘教を展開された。師と共に心を合わせて戦ったがゆえに、大聖人の「意趣」が分かったのです。「師の心」が正しく伝わったかどうかは、「弟子の行動」を見れば分かるものです。いくら三大秘法を持っていると自称しても、万人の幸福を願う広宣流布への行動がなければ、大聖人の「意趣」を見失った姿であると断ずる以外にない。-と。それが、「新版」77 頁では、上記が**完全削除。この重要義の長文を完全削除とは酷いです!**

29.「講義」180 頁には—私どもは、厳然と末法における真実の三宝を知っている。すなわち、仏宝は末法の御本仏・日蓮大聖人、(中略)僧宝は日興上人にほかなりません。また、僧とは”集い”を意味するサンガ(僧伽)のことですから、広げていえば、大聖人の仏法を正しく持ち弘めて、民衆救済、平和実現に励む和合僧団を指す。現代でいえば創価学会が、その和合僧団であることは、いうまでもありません。—と。

それが、「新版」431 頁では—「三宝」とは、仏と、仏の教え(法)と、その教えを守り弘める人々の集い(僧)のことです。三宝はいわば民衆救済の要です。それゆえに、仏法では人々を救う宝として尊重する。私どもは、厳然と末法における真実の三宝を知っています。—に変更。

その後、「講義」の—仏宝は末法の御本仏・日蓮大聖人、僧宝は日興上人にほかなりません。—を削除して、また、僧とは”集い”を意味するサンガ(僧伽)のことですから、今日で言えば、大聖人の仏法を正しく持ち弘めて、民衆救済、平和実現に励む和合僧団、即ち創価学会が僧法であることは、言うまでもありません—とだけです。「広げていえば創価学会」を削除して、創価学会だけに変更。

5) その他

11.「新版」の 184 頁では—今や、地球上を題目が包む時代になりました。—と追記。しかし、「講義」23 頁にはこの文言はありません。

30.「講義」211 頁には—戸田先生も語られていた。「毎自作是念の毎という字はですね、三世—過去、現在、未来ということなんです。毎自作是念とは、大聖人様が久遠元初の昔より常に我等衆生を救わんと念じられたことであり、重大な御文である。」—と。それが、「新版」460 頁では、上記を完全削除。

(私見)「講義」の最終章にある、この戸田先生の“重大な御文”の引用文が「新版」で削除されることは、「新版」の自語相違です。

人本尊否定の悪影響

「日蓮がたましひをすみにそめながしてかきて候ぞ信じさせ給へ、仏の御意は法華経なり日蓮がたましひは南無妙法蓮華経にすぎたるはなし」経王殿御返事

私たち学会員は、この御書を大聖人即南無妙法蓮華経であり、御本尊即大聖人の御生命そのものであると解釈してきた。しかし、学会首脳部は、『**新版**』176 頁では—「如来寿量品」の「如来」とは「南無妙法蓮華経如来」、すなわち**南無妙法蓮華経と一体の仏の生命のことであると宣言**—に変更。』とすることで、御本尊とは、大聖人の生命に宿る南無妙法蓮華経を本尊とするのだ、という微妙に違う表現をすることで、大聖人の生命(一念三千)と法を切り離した解釈を若い人々に教え込み、同じ御文を古い世代と若い世代では解釈が全く異なるように導こうとしているのがみて取れる。

教学に関心がない家庭だと、同じ経王殿御返事の御文を読んだとしても、次のような御書解釈の分断を生むだろう。

古い世代：南無妙法蓮華経即日蓮大聖人の御生命であり、人即法を祈りの対象の本尊とする(人法一箇)

若い世代：大聖人の生命に宿る南無妙法蓮華経を取り出した題目を本尊とする。(釈迦も大聖人も祈りの対象ではない)(単法本尊)

しかもお互いにこの御書解釈の違いに全く気が付かず、令法久住が失われ、師弟不二も崩壊してしまうだろう。ここに師弟不二を分断させようとする**恐るべき天魔の正体が隠れている**。

「**新版**」1頁の「**発刊に当たって**」では一本講義では、第二代会長・戸田城聖先生の講義も十二分に踏まえながら、二十一世紀の現代世界に向かって、仏法の人間主義を展開する内容になっており、「**師弟合作**」の法華経講義であると言える。(1頁13行目～2頁2行目)一と、**明言です。それなのに、本文で、戸田先生が「重大な御文」とまで言われた言質を明記しないとは、「新版」は一体何をもって、「十二分に踏まえているのか」と思わざるを得ません。「師弟合作」ではない！「師弟否定」とまで思えてしまいます。**

結論、「**新版**」は池田先生が「講義」でご教示の「**久遠元初**」を曲解し「**久遠元初の自受用報身如来**」を完全に削除、三宝の内、「僧宝は日興上人」を削除、「創価学会」だけにしています。つまり、表面だけは「文上」と「文底」なのです。日蓮仏法は「久遠元初自受用報身如来」にそが、文底なのです！ゆえに、「**新版**」は「**文底もどきの作文**」であり、先生のご指導とは言えないです。

以上が 1.2 拙文での30項目の指摘です。

以降、上記30個の論述に基づき、この中に入れる形で、池田名誉会長の「法華経方便品・寿量品講義」の1、2、3(以下、「講義」と略)と、「新版 法華経方便品・自我偈講義」(以下、「新版」と略)との比較を通して見つけた、**新たな削除、変更、補講を15個(①～⑮)**論述致します。



池田先生の『法華経 方便品・寿量品講義』 1方便品と、「新版」との比較

①. 1.2 拙文の 1.の前に記し置きたいのは、－「講義」15 頁には一日淳上人は、牧口先生を「生来仏のつかい」と讃嘆され、戸田先生を「地涌の菩薩の先達」と称えていました。－と記されていますが、「新版」20 頁では、削除されていることです。

(私見)、「新版」は、これ以降、全編で池田先生が宗門について記された重要な論述を削除していますが、それは宗門の全面的な否定の思惑としか思えないのです。私は、1.2 の拙文を記していた時には気づかなかったのですが、学会と宗門の清流、すなわち、**日興門流の正義を三代会長は認められ**、宗門また、代々の法主との良好な関係、逸話を、池田先生が記し残された意義は重要なことであり、結論、日蓮仏法の正義、清流たる日興、日寛上人の教学の正統部分は、今も学会教学の基盤であることを、まずは認識したく思っております。その上で、後述の、池田先生が日顕宗の腐敗、墮落との破邪顕正の勝利の歴史を記し残された文をも削除することは、「教学要綱」の誤りである宗門教学の良否をいっしょくたにして排除する偏向性と同じであると思います。

②. ①と同様に「講義」19頁にある池田先生の下記が「新版」23頁では**完全削除**です。

－(万人に大きく開かれ、時代・社会に生き生きと脈動していくところにこそ文底仏法の真価があるのです。に続き)、－この点で転倒したのが日顕宗です。文底仏法の教えを悪用し、権威の殻に包んでしまった。僧侶や寺院を特権化し、御本尊を民衆支配の道具にした。自分たちは満足な修行もせず、遊蕩にふけり、人間としての根っこを腐らせてしまった。恐ろしいことです。大聖人の御精神を殺してしまった。－と。

(私見)池田先生の、この重要な破邪顕正の歴史を記し置かれた文を、削除してはならないと思います。結論、宗門と宗門教学の腐敗、墮落は日顕宗に極まったのであり、今の学会教学は、三代会長が厳護された日蓮仏法の正義である日興門流の清流に戻ったのだと拝しております。しかし、「教学要綱」は、その正義、清流である日興門流までも宗門教学だと、いっしょくたにして無視していると思えません。

③さらに、1.2 拙文の 6 で指摘済みですが、池田先生の「講義」77 頁での記述一日顕宗の権威主義は、法華経の心が何もわかっていない証拠なのです。一を、「新版」では削除です。(私見)これも、池田先生が広布の破邪顕正の歴史として、日顕宗の墮落を明確に残されたことへの無視、違背であると思います。池田先生は、広布史において何が間違いであり、何が正義であるかの判別を明確にして下さっているのに、これを削除では、まるで宗門全てが現在および、今後の学会にとっては過去の不要物として葬り去るが如きに思える「教学要綱」の偏向性と重なってしまうのです。

④. 1. 2 拙文、4 の中で、「講義」の 23 頁を引用しましたが、その途中の(注 2)の全文(「講義」の 29 頁に別掲載)が「新版」29 頁では完全削除です。それは、次の重要な文です。

一日寛上人は「当流行事抄」で、方便品の読誦には所破・借文の二義があり、寿量品の読誦には所破・所用の二義があることを示されている。方便品の借文＝方便品の諸法実相・十如是等の文で示されている一念三千の法門は、本門寿量品で仏の久遠の本地、仏の本国土が明かされてはじめて成就する。それ故、方便品の文を借りて、本門で成就する実義(その元意は寿量文底の法義)を顕わすのである。

寿量品の所用＝寿量品には、「我本行菩薩道」の本因初住の文の底に下種の大法が秘沈されている。寿量品の読誦は、その法義が秘沈されている文を用いていくので、所用となるのである。一と。

(私見)この、日寛上人の「当流行事抄」の引用文は、方便品・寿量品の読誦の意義を示した非常に重要な論証であります。これを、「新版」は完全削除なのです。それは、上記、①、②と同じく、日寛教学を無視する態度であり、それは、根底で、「教学要綱」と同じ偏向性であると思います。

⑤. 1.2 の拙文、6 と 7 の間、「講義」の 80 頁にある表題—大聖人の「意趣」を学会が実践—を、「新版」74 頁では、—「講義」の次の表題である—仏の智慧は慈悲から生まれる—に含めてしまい、その表題の中で仏について—釈尊の智慧—と変更しています。

(私見)この、表題変更について、私は、1月2日の時、見落としてしまったのです。こんな酷い変更—「大聖人」の表題を削除して、その論述を「仏＝釈尊」としているのです。まさに、これこそが改竄であり、騙し以外の何でしょうか！池田先生が、「講義」で引用の御文—「宜しきに随って説きたもう所、意趣解し難し」—を、表題として一大聖人の「意趣」を学会が実践—とされたのに、それを変更して用いないのは、先生への裏切りではないでしょうか。酷いの一言です。

⑥. 1.2 拙文の8の論述は、「講義」の128頁が完全削除であることを指摘したのですが、実は、その引用の最後に(注1)が記してあり、その内容紹介も「講義」142頁にあり、下記の記述です。それは、「御本尊」についての重要な記述であります。それが、「新版」122頁では、完全に削除されています。これも、1月2日時点での私の見落としでしたが、今回の拙文の指摘として大変重要な点であると考えます。それは、以下の文です。
—「無上の宝聚とは仏の生命のことであり、日蓮大聖人は南無妙法蓮華經の御本尊として顕わされた。」—です。池田先生のこのご指導を完全削除の「新版」は、論外です。

池田先生の『法華經 方便品・寿量品講義』2 寿量品1と、「新版」との比較

⑦. 1.2 拙文の19の補足として、「講義」の66頁にある名字凡夫(注2)と内証真身(注3)の詳述が73頁にありますが、「新版」216頁では削除です。

(私見)この二つの思想こそ日蓮仏法の根本です。これを削除とは、これまた、言語道断です。73頁には、名字凡夫とは一初めて正法を聞いて仏道修行を始めた位である名字即にいる凡夫—と。また、内証真身とは一内に持っている悟りの境地、真実の姿—と明記されています。

⑧. 1.2 拙文の21と22の間として、「講義」106頁には—表題「正しき生命観」の指導者を時代は待望—として、以下の池田先生の御指導がありますが、それが「新版」370頁では、表題ごと完全削除です。

—苦しんで人を見たら、応じて立ち上がるのが仏の慈悲です。創価学会の実践の根底には、この慈悲の心がある。人の苦悩に同苦する心がある。だからこそ、真剣さが生まれ、智慧がわき、行動となり、発展があったのです。このことは絶対に忘れてはならない。また、戸田先生は「人々が仏を感じる、指導者を欲する、それに応じて仏が出現する」と語っておられた。仏は、深き生命観を体現した真の指導者です。

人生にも社会にも文明にも、行き詰まりがあります。この行き詰まりを開くのは、生命への深い洞察に根ざした哲学です。哲学なき時代の人々の心はさまよっている。―「このままでよいのか。しかし、どうしたらよいか分からない」「幸せになりたい。しかし、何が幸せなのか」と。広く言えば、この声なき声こそ、仏を感じ、呼び求める声です。私たちは、仏にならい、このような現代人の声に応じて立ち上がり、正義の対話の渦を巻き起こしてまいりましょう。

⑨. 1. 2拙文の22では、詳細を省略でしたが、やはり、池田先生の重要なご指導ですので掲載します。「講義」109頁の表題―仏法は最高の「健康」「長寿」の法―での池田先生の御本尊についての下記ご指導が、**「新版」248頁では題号も含め全文削除です。**

―御本尊への信心を根本として、人々の幸福のために祈り、動き、語る―そのリズム正しい繰り返しこそ、我が生命を「長寿へ」「健康へ」「幸福へ」と向かわせるのです。私が以前、人生を健康で生き抜くために提案した次の「四つのモットー」も、この信心即生活のリズムを分かりやすく述べたものです。①張りのある勤行②無理と無駄のない生活③献身の行動④教養ある食生活、の四項目―。(続く)

いわば信心は、最高の「健康の法」「長寿の法」でもあるのです。以上の経文を、文底の立場から読めば次のように言えます。まず、「我が所に来至する」―仏の前に衆生が集うこととは、文底からいえば御本尊の前に私たちが端座することです。仏は、衆生の気根を見て、それぞれの状態に応じて法を説く―末法でいえば、万人を救済する日蓮大聖人の慈悲のお振る舞いです。戸田先生は、この経文について、御本尊がわれわれの信心などを観じ、大きな慈悲を下さるのでであると述べられました。「諸根利鈍」とは、私たちの立場でいえば、信心の厚薄といえる。信心が深まれば深まるほど、御本尊の無量の功力を著すことができるのです

池田先生の『法華経 方便品・寿量品講義』 完 3寿量品―2と、「新版」との比較

⑩. 1. 2拙文の26と27の間として、68頁には、表題で―色香美味とは「三大秘法」の御本尊―と明記されているのに、「新版」336頁では、この表題を**完全削除**して、新たな表題として、―末法における「大良薬」が南無妙法蓮華経―と変更です。

さらに、69頁の―天台は、この「色香美味」を、仏教実践の基本となる戒定慧に当てはめ、色が戒、香が定、味が智慧であると説明しています。また、大聖人の仏法で言えば、色が本門の戒壇、香が本門の本尊、味が本門の題目に当たります。―との、赤字の大聖人の解釈を、池田先生が記されているのに、「新版」は天台の解釈だけ載せて、大聖人様の解釈を削除なのです。あり得ないです。

⑪. さらには、70頁にある池田先生の以下の長文―誰もが飲める(実践できる)ようにするか。これが「良医」の仕事です。さて、子に薬草を飲ませる時、父は語ります。「この大薬は、色も香りも味も素晴らしいよ。みんな、飲みなさい。直ちに苦しみがなくなり、また、体が丈夫になるよ」と。文底から見れば、御本尊の功德が示されている一節です。御本尊は苦しんでいる人にとっては大良薬です。祈りとして叶わざるなく、罪として滅せざるなく、福として来たらざるなく、理として顕ざるなし、という大功德がそなわっています。

(中略)戸田先生は、この父の言葉は「仏の約束」であると講義されています。すなわち、文底から読めば、この経文は、日蓮大聖人が末法のあらゆる人々に対して、誰もが必ず幸福になれると宣言されている一節になります。―と、記されていますが、「新版」33頁では、上記の赤字が完全削除され、ただ―この大良薬とは、末法においては南無妙法蓮華経であることは言うまでもありません。―としています。

(私見)「講義」での池田先生の表題で示された、「三大秘法」の御本尊が消されています。そして、「講義」では、大良薬は御本尊と言われているのに、「新版」では南無妙法蓮華経に変更です。これはおかしいです。御本尊の真義は人法一箇ですが、それを「新版」では意味したくないので、ただ単に、南無妙法蓮華経との「法」のみでしか解釈しないのです。そして、「御本尊」の名称自体を削除なのです。これは、酷いです。

⑫. 1.2 拙文の27で記述しましたが、もっと正確に、下記へ論述し直しました。

「講義」92頁には一大聖人御自身、一往・文上の御立場では、この地涌の菩薩のリーダーである上行菩薩の再誕として妙法弘通に挑まれました。しかし、再往・文底では、大聖人こそ末法万年の民衆を救う南無妙法蓮華経の「大良薬」を残された御本仏であられることは言うまでもありません。大聖人こそ、一切衆生の「父」であり、「良医」なのです。―と。それが、「新版」358頁では―「一往・文上の御立場では」と「再誕」の重要句を削除し、大聖人御自身、この地涌の菩薩のリーダーである上行菩薩との御自覚で妙法弘通に挑まれました。(中略)さらに、「しかし、再往・文底では」を削除し、大聖人こそ、末法万年の民衆を救う南無妙法蓮華経の「大良薬」を残された御本仏と拝しています。まさしく、大聖人こそ、末法の一切衆生の「父」であり、「良医」なのです。―に変更。

(私見)上記については、以下の破折を記すべきでしたので、ここで論述します。それは一結論、「新版」は「再誕・文底では」を削除したことで、日蓮大聖人を上行菩薩だけの立場に留めて、結果、本地である久遠元初の自受用身を否定し、単なる釈迦から法華経の委託をされた上行菩薩であるとするのです。つまり釈迦が上位であり、主人なのだとする大妄語をしているのです。

池田先生は「講義」において法華經を尊重し、まずは文上通りに「良医」を釈尊であるとされ、その上で、法華經の文底に秘められた真意である久遠元初自受用身であられる人法一箇の日蓮大聖人のお立場が、末法限定ではない真実の「良医」とであると論述を深化、展開されています。それに反し「新版」358頁は、終始一貫して、法華經文上からの解釈をしているのです。この詭弁を見極めるのは難しいです。こんな寿量品講義の放置は大聖人と三代会長に叱られます。（「良医」については18頁で詳述します。）

⑬. 1. 2拙文の27と28の間として、「講義」106 頁にある—「御義口伝」には「自我偈は自受用身なり」(御書 759 頁)と仰せです。(中略)自我偈は、大聖人御自身の自由自在の御境涯を表している經文だと仰せられているのです。—が、「新版」370頁では、—自我偈は、仏の自由自在—に変更 です。(私見)なんで、大聖人を、ただの仏に変更するのですか。文上の仏にするのですか？これでは、日蓮仏法ではないです。

⑭. ⑬と同じく、1. 2拙文の27と28の間として、「講義」146 頁には、表題として—恩師の「法華經講義」開始から五十周年—とあり、池田先生の思いとして、以下のご指導がございます。—二月十一日——恩師戸田城聖先生の誕生日です。毎年、この日が巡りくるときに、私の心は弾む。今は、日本中、世界中で、恩師の生誕の日を祝ってくれています。これほどうれしいことはありません。(中略)講義を通して、戸田先生の智慧と確信の指導を、世界各国の人々が一段と深く読んでいます。感動と決意が広がっている。お誕生日の最高のお祝いとなりました。—が、「新版」404頁では、表題も含め、赤字の論述が削除です。(私見)池田先生の戸田先生への真心を、なぜ削除するのですか！

⑮. ⑭と同じく、1. 2拙文の27と28の間として、「講義」151 頁には—かつて日淳上人は、戸田先生亡きあと、心を一つに前進を誓った私たちの姿を見て「全く靈山一会儼然未散と申すべきであると思うのであります。これを言葉を変えますれば真の靈山浄土、仏の一大集まりであると私は深く敬意を表する次第であります」と述べられたことがあります。—と記されていますが、「新版」407頁では、上記、赤字が完全削除です。

(私見)池田先生は、戸田先生と日淳上人との親交、ご尊敬の関係が、どれほど素晴らしいかを存じ上げていらしたからこそ、ここで、日淳上人のお言葉を引用されたのです。それを、なぜ、「新版」は無視し削除するのでしょうか？これでは、宗門のことはすべて認めないとの方針なのかと、思ってしまう。否、認めないのです。

以上で、「講義」と「新版」との比較についての追加論述を終えます。次頁以降、この拙文の新たな論点5つについて記します。

本拙文の4、5頁で記した(5つの新たな論点)を、再度、掲載します。

1. 戸田先生の法華経講義のご指導から、先生の寿量品講義は内証の寿量品、即ち、日蓮大聖人の己心に証得された寿量品であることと、「新版」に記述された寿量品の記述の誤りを、戸田先生の講義から再度、明確に破折すること。(特に根本である「良医」が釈迦になっている誤りへの破折)
2. 戸田先生の法華経講義は、相伝書の「御義口伝」と「本因妙抄」と「百六箇抄」を根本としていることを示し、それらに反し「教学要綱」とそれを支持する男子部教室が相伝を全く無視することへの破折。
3. 「若き日の日記」(現在、大白蓮華に連載中)より池田先生が相伝書を研鑽されたことをご紹介します。2.と同じく、それらに反し「教学要綱」とそれを支持する男子部教室が相伝を全く無視することへの破折。
4. 「教学要綱」の最大の誤り2つ(①28 頁で、如来寿量品における釈尊を4回も「永遠の仏」と記した誤り、②78, 79 頁で、日蓮本仏論の完全否定となる大妄語、即ち、御本尊の相貌について「寿量の仏」を釈尊とした誤り) さらに、私が当初から持つ主要な5つの疑問、誤りに対し、戸田先生の講義、池田先生のご指導より破折する事。
5. まとめと所感

以下、新たな5つの論点について論述致します。

1. 戸田先生の法華経講義のご指導から、先生の寿量品講義は内証の寿量品、即ち、日蓮大聖人の己心に証得された寿量品であることと、「新版」の寿量品の記述の誤りを、戸田先生の講義から再度、明確に破折すること。(特に根本である「良医」が釈迦になっている誤りへの破折＝本拙文19頁、⑫への加筆となります。) について－

戸田先生のご指導の根本は、本拙文2ページで示した下記のご指導です。(再掲載)

戸田城聖全集の第1巻 254 頁の「法華経を読む心がまえ」には、一日蓮大聖人の法門は、いまだ、だれびともいわざる寿量文底の南無妙法蓮華経、すなわち文底下種の法門である。末法の今日、法華経を読まんとする者はこの点に深く留意し、末法適時の南無妙法蓮華経を根源として、依義判文の原理により、これを読破しなければならぬ。(中略)されば、予の講義せんとするものは、「御義口伝」「本因妙抄」「百六箇抄」等の秘書を基として、日寛上人の依義判文の流れを汲みて講ぜんとするものである。－

まず、全集第5巻331頁の「方便品・寿量品講義」―南無妙法蓮華經如来寿量品第十六には、以下の論述があります。―

日蓮大聖人の仏法と釈尊の仏法の相違は、厳然たるものであります。その要が、どこにあるかと申しますれば、御義口伝がいちばん明らかであり、肝要であるとおもいます。御義口伝とは、日蓮大聖人の法華經講義の口伝書であります。第二祖日興上人がおしたためになった御書であります。血脈抄と同じく文底の仏法をとかれているのであります。

御義口伝巻下の大事の書き出しに、「第一南無妙法蓮華經如来寿量品第十六の事」(御書752頁)とあります。これがこの方便品寿量品の講義の根本であり、しめくりになる文であります。釈尊の説いたものは「南無」の字がなくて、「妙法蓮華經如来寿量品第十六」であります。それでは、なぜ日蓮大聖人が、ここに「南無」とおつけになったかということではありますが、これが大事の肝要なのであります。「南無妙法蓮華經如来……」と来たときには、この「如来」が南無妙法蓮華經の如来になるのであります。すると、これは文底の仏になる。妙法蓮華經如来寿量品の如来は文上の如来になる。この日蓮大聖人の御読みになっている如来は文上の如来ではない。こういうことがはっきりいたします。

「南無妙法蓮華經如来寿量品第十六」となっていますから、如来の本体とはなにかといえ、ば、「南無妙法蓮華經」になってしまうのであります。ここに南無という二字をおつけになっただけで、如来という二文字の読み方がぜんぜん変わってくるのであります。

(中略)「御義口伝に云く此の品の題目は日蓮が身に当たる大事なり」(同頁) 日蓮大聖人の御身に当たる大事とおおせられるわけは、「南無妙法蓮華經如来寿量品第十六」なのですから、南無妙法蓮華經の如来でなければ、如来ではないと立てられるというへんにあります。

その南無妙法蓮華經という如来を上行菩薩が受け取られ、上行菩薩の再誕として、日蓮大聖人がひとまずおうまれになり、その如来を建立されるのであります。すなわち、三大秘法そのものが南無妙法蓮華經如来寿量品になってくるのであります。ですから日蓮大聖人の御身に当たる大事、南無妙法蓮華經如来寿量品第十六とおしたためになったのであります。―と。

上記のご指導と同じく、以下、「御義口伝」「本因妙抄」「百六箇抄」等、の引用をされた戸田先生のご指導から「良医」について論述します。

戸田城聖全集第一巻、巻頭言編の94頁には「**寿量品について**」との論文があります。その冒頭で、戸田先生は— 寿量品において、「**譬如良医**」とは久遠元初の自受用身、無作三身の如来、また、南無妙法蓮華經とも申し上げる。「**是時其父 還来帰家**」の**その父は、日蓮大聖人**であらせられる。(中略)以上のごとく心得て、經文は拝すべきで、**譬如良医をインドの釈迦と読んでではならぬ。**—と記されています。

また、同じく120頁には—「**譬如良医について**」との論文があります。その冒頭には、—「**譬如良医。智慧聰達。明練方藥。善治衆病。其人多。諸子息。若十。二十。乃至百数。以有事縁。遠至余国。諸子於後。飲他毒藥。藥發悶乱。宛転于地。**」(妙法蓮華經並開結502頁)— この寿量品の文は、今日、学会が他宗派を邪教と断ずる依文である。今日、この読み方を解釈しているものは、天台家によっている者だけである。大聖人の「**余が内証の寿量品**」と仰せられる心地において、**これを文字にして説いている者が、ほとんどいないことを、吾人は遺憾とする。**ゆえに、浅学不憚の身をもって、いま大聖人の教えに従って、これを説こうと企てたのである。**内証の寿量品**とは大聖人のお悟りであり、末法ご本仏の証智である。**本因妙抄**にいわく、

「今、会釈して云わく、諸の仏菩薩の定光三昧も、凡聖一如の証道、刹那・半偈の成道も、我が家の勝劣修行の南無妙法蓮華經の一言に摂め尽くすものなり。

この血脈を列ぬることは、末代浅学の者の予が仮字の消息を蔑如し、天台の漢字の止観を見て眼目を迷わし、心意を驚動し、あるいは仮字を漢字と成し、あるいは「止観の明静なることは、前代にいまだ聞かず」の見に耽り、本迹一致の思いを成す。

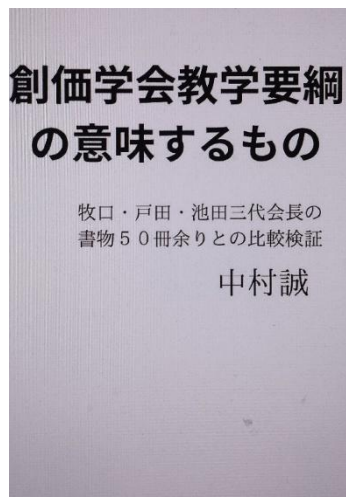
我が**内証の寿量品**を知らずして止観に同じ、ただ自見の僻見を本として、予が立義を破失して惡道に墮つべき故に、天台三大章疏の奥伝に属し天台・伝教等の秘し給える正義、生死一大事の秘伝を書き顕し奉ることは、かつは恐れ有り、かつは憚り有り。

広宣流布の日、公亭において応にこれを披覽し奉るべし。会通を加うることは、かつは広宣流布のため、かつは末代浅学のためなり。また天台・伝教の釈等も、予が真実の本懷にあらざるか。未来嬰兒の弟子等、彼を本懷かと思ふべきものか。」(新2227、全876)

また、**百六箇抄**にいわく、

「自受用身は本・上行日蓮は迹なり、我等が**内証の寿量品**とは脱益寿量の文底の本因妙の事なり」(全863)云々。以上の大聖人の仰せに明らかなごとく、文底の寿量品は、天台家の読み方とは全然違うことが明らかであろう。さて、「**良医**」とは、**天台家によれば、単に如来と訳すのであるが、それも釈迦を意味している**のである。しかるに、**当流の意味においては、久遠元初の自受用身、すなわち、無作三身如来のことである。この自受用報身は、日蓮大聖人の本地である。**—と。

さらに、アマゾン新刊書、[中村誠著『創価学会教学要綱』の意味するもの](#)の考察が、非常に分かり易いので、以下、紹介させていただきます。正論と拝しています。



一遣使還告を文底から読むとどうなるか。戸田先生は次のように講義されています。「しからば文底(観心)からお読みすればどうなるか。譬如良医の良医とは、久遠元初の大昔に、我身地水火風空と知ろしめして、即座に悟られた自受用報身如来のことであります。帰ってきた父とは、日蓮大聖人であります。

しかして遣使還告の使いとは、総本山の御法主上人であります」(『戸田城聖全集』第5巻 p. 389) 当時は、日蓮正宗創価学会の時代であるため、「遣使還告の使い」を大石寺の法主とするのは仕方がないことだろう。宗門が邪教となった今は、「遣使還告の使い」とは、牧口・戸田・池田先生の永遠の師匠であり、大石寺からは日目・日寛・堀日亨等の名法主もこのカテゴリーに入るだろう。

「さて、「良医」とは、天台家によれば、単に如来と訳すのであるが、それも釈迦を意味しているのである。しかるに、当流の意においては、久遠元初の自受用報身、すなわち、無作三身如来のことである。この自受用報身は、日蓮大聖人の本地である」(『戸田城聖全集』第1巻 p. 122)。そもそもの話だが、釈尊の使い日蓮という思想は、法華經寿量品の「遣使還告」(良医の使い)から来ているのだから、釈迦の使い日蓮を主張するのであれば、良医は釈迦でなければならない。即ち、本仏とは釈迦であり、その使い(日蓮大菩薩)が大聖人ということになる。これが文上の法華經の世界観である。

末法の御本仏を大聖人とするならば、南無妙法蓮華經という妙薬を広めた大聖人こそが「良医」でなくてはならない。釈迦の使い日蓮と、末法の御本仏日蓮というのは同時には成り立たない。『教学要綱』は大聖人を釈迦の使いとしながら同時に末法の本仏としているが、これは理論的に破綻しているのである。これは宗教的欺瞞以外の何者でもない。一と。

(私見) 上記、戸田先生のご指導と、[中村誠著『創価学会教学要綱』の意味するもの](#)の論考より、寿量品で最も大事な論点である「**良医**」を釈尊とする「**新版**」は文上解釈の詭弁と断定出来、「**新版**」を池田先生のご指導であるとは認めることが出来ないのです。ずばり、改竄であり、学会員さんに対する冒涇であると思えません。

さらに、「**内証の寿量品**」について池田先生の「**百六箇抄**」講義より、研鑽しました。その深義を皆様と共有させて頂きたく、その主要部を、下記に引用申し上げます。

「百六箇抄」講義 一下種の法華經教主の本迹一

自受用身は本・上行日蓮は迹なり。我等が**内証の寿量品**とは、**脱益寿量の文底の本因妙の事なり**。其の教主は某なり。(新2210,全863)一について、池田先生は**百六箇抄講義**において、次のように記されています。

一**寿量品**の最も重要な意義は、**発迹顕本**にあります。しかしながら、ひとことに顕本といっても、そこにあらわれた本地がいかなるものかによって、異なってくる。故にこれを文上顕本と文底顕本に立て分けるのであります。文上顕本とは五百塵点劫成道という本地を顕したことであり、文底顕本とは久遠元初という本地を顕したことであります。つまり、**寿量品第十六**を五百塵点劫成道の釈尊の顕本の品として理解していくことを、**文上の寿量品**といいます。それに対し、同じ寿量品を、**久遠元初の自受用報身の顕本の品**であると理解していくのが、日蓮大聖人の内証の本地を顕した品としての読み方であり、故に、**内証の寿量品**と称するのであります。

例えば「我実成仏」という文を、その文のままに読めば、ということは文上の寿量品で読めば、五百塵点劫の成道を指して「我実成仏」と説いたのであり、それは文上顕本になります。もし、久遠元初の成道を指して「我実成仏」と説くというのならば、これは文底顕本であり、文底の寿量品、**内証の寿量品**の読み方となります。日蓮大聖人は「御義口伝」において、寿量品の説法をされていますが、そこでは、文上の寿量品としてではなく、**文底の寿量品、内証の寿量品**としてこれを読まれております。

また、**恩師戸田先生が、寿量品講義に際して**文上と文底の両様の読み方を懇切に教えられたのも、その正意は**内証の寿量品**を説かんがためでありました。私どもが勤行において寿量品を読む正意も、文上脱益の寿量品をよむのではない。まさしく、寿量品の2000余文字の経文を、日蓮大聖人の仏法の説明として読んでいくのであり、このことを**文底下種の寿量品、内証の寿量品として読む**、ということであります。一と。

さらに、戸田先生の5巻「方便品寿量品講義」の下記ご指導もご研鑽下さい。

326頁には、一古今の大学匠、日寛上人は、**すべての仏と南無妙法蓮華經如来寿量品の如来、すなわち、久遠元初の自受用報身如来(じじゅゆうほうしんによらい)との関係を「百千枝葉 同じく一根に趣(おもむ)くが如し」と説かれております**。すなわち文底の仏は一根であり、文上寿量品の仏は幹や枝、迹門の仏は花や葉であり、迹門や文上の仏は文底の仏に帰するのであります。 25/68

文上の仏、迹門の仏はすべて如来寿量品の如来の分身仏であり、一根から出た随他意の仏であり、釈迦仏法の人々をしてのみ歓喜せしめる仏であります。(中略)それでは、なぜ、日蓮大聖人の仏法からみると、迹門にあたる釈尊の寿量品をわれわれが読むのか、日蓮大聖人が読ませるのかといえ、われわれが読む寿量品は、日蓮大聖人の御内証の寿量品なのであります。—とございます。そして、久遠元初の自受用報身如来につきまして以下のように記されております。

また、376頁には —大聖人は、久遠元初の自受用報身如来であられます。それが第一番には五百塵点劫の釈尊と現れ、あらゆるところに久遠元初の自受用報身如来の慈悲を垂れられ、衆生を見られて、特にこの末法へ大聖人がお現われになった。この原理は五百塵点劫に仏がおった。その中間には、然燈仏(ねんとうぶつ)があり、その然燈仏と関係した儒童菩薩が釈迦如来として生まれた。われわれが大聖人を拝し奉れば、末法になってお現われになったのだと思うが、本当はそうではないのであります。

久遠元初という時に、すでに地水火風空なりと知(しろ)しめして即座にお悟りになった仏なのであります。それが種々の仏として、ご自身がお出ましになり、迹を垂れられ、使いをよこされた。そうして末法には、ご自身がここへお現われになった。中間の仏はことごとく、わが分身仏であり、迹仏であります。みな久遠元初の自受用報身如来の息のかかったものであります。末法に大聖人が出現されたことについては、このように拝さなければなりません。— と。

さらに、参考として、「[仏教哲学大辞典第三版](#)」より、—

1233頁には、**内証とは**—自己の心の中の悟り、また、本体、本意をいう。外用に対する語。仏・菩薩が内証を隠して衆生を教化していくために現した姿、作用を外用という。日蓮大聖人は、**外用の辺では上行菩薩の再誕日蓮であり、内証の辺では久遠元初の自受用身の再誕日蓮となる。**

同1234頁には、**内証真身の成道とは**—日蓮大聖人が名字の凡夫のままで久遠元初の自受用身如来、末法下種本因妙の御本仏と開顕されたことをいう。

同1234頁には、**内証の寿量品とは**—日蓮大聖人の己心に証得された寿量品のこと。寿量文底の法体である三大秘法の南無妙法蓮華經を指す。大聖人は**本因妙抄**に「一代応仏の寿量品を迹と為し内証の寿量品を本と為し」(871頁)と述べられ、**百六箇抄**に「我等が内証の寿量品とは脱益寿量の文底の本因妙の事なり、其の教主は某なり」(863頁)と述べられている。更に**本因妙抄**に「文の底とは久遠実成の名字の妙法を余行にわたさず直達の正観・事行の一念三千の南無妙法蓮華經是なり」(877頁)—とあります。

(私見)この度、戸田先生の「方便品・寿量品講義」を拝読して、初めて内証の寿量品の深義を拝することができ、日蓮仏法がどれほど深く偉大であるか心肝に染めています。そして、それに反し、「新版」が、日蓮大聖人の本地である久遠元初自受用身を完全に削除し、曼荼羅御本尊の相貌についての原理である人法一箇も完全削除等々、想像すらできない事態を見ることになり、私の学会本部と本部教室への失望は大変大きなものでした。そして、私が、戸田・池田先生から頂きました本当の日蓮仏法について、後継の皆様に記し置くことこそが、私の使命と確信し、この度の拙文作成に至りました。

2.戸田先生の法華経講義は、相伝書の「御義口伝」と「本因妙抄」と「百六箇抄」を根本としていることを示し、それらに反し「教学要綱」とそれを支持する男子部教室が相伝を全く無視することへの破折。

まずは、以下、昨年10月18日付聖教電子版「男子部教室論考」には、一「教学要綱」の誤りを糾した書『創価学会教学要綱』の考察：仏教史の視点から」一の著者である須田晴夫氏に対して、以下記しています。

一 氏(須田氏)は、大聖人を根源仏とする論拠として、「百六箇抄」「本因妙抄」などの相伝書を引用するが、これらの相伝書が宗門の法主信仰の温床となってきたことは事実である。また、宗内でしか通用しない相伝書に依拠するのでは、普遍的な説明にはならない。『教学要綱』では、論拠とする御書は、日蓮仏法の骨格というべき十大部を中心としている。一と。

これに対して、須田氏は一『教学要綱』は日興門流の相伝書をただ無視するのみで明確に否定していないが、「(男子部教室)論考」は「宗内でしか通用しない相伝書に依拠するのでは、普遍的な説明にはならない」として、『教学要綱』の立場を超えて、相伝書を全面的に否定する立場に立つ。「本因妙抄」などの相伝書は日興在世中に成立し、日興門流の初期から日興門流の根本教義を明示している教義書である。その相伝書を「宗内でしか通用しない」ものとして否定することは取りも直さず日興門流の教義全体を否定することになるだろう。一と、述べています「『創価学会教学要綱』と日蓮本仏論の考察」(p.132)。

上記によって、私は須田氏が正論であると考えています。なぜなら、相伝書こそが、戸田先生、池田先生の師弟不二の原点だからです。既に、上述 1. で、戸田先生が「御義口伝」「本因妙抄」「百六箇抄」を用いて方便品・寿量品講義をされたことは論証しました。

池田先生は、随筆 新・人間革命4(2001. 10. 19)で—教学研鑽の喜び「御義口伝」—の表題で、次のように述べられています。

—「御義口伝」は、日蓮大聖人の御講述を、日興上人が筆録された重書である。この”師弟一体”の御口伝書は、戸田先生と私にとっても、ことに思い出の深い御書である。師のもとで、私が教学を学び始めた時、まず「御義口伝」から入ったのである。—と。

(私見)池田先生のこのお言葉を、「教学要綱」はなぜ尊重しないのですか？また、男子部教学室は、「教学要綱」の立場を更に超えて、—宗内でしか通用しない相伝書に依拠するのでは、普遍的な説明にはならない。—とまで断定していますが、こんな、極論を男子部教学室は放言して良いのでしょうか？これは、取り返しのつかない暴言であると思います。

池田先生は、戸田先生を唯一、絶対無二、最高の師と仰ぎ、19歳で入信以来、ずっと、戸田先生から御書の講義を拝受されてきた事実が、「若き日の日記」に記されています。そして、その結果として、会長ご就任後に、「御義口伝講義」と「百六箇抄講義」をされています。

それは、まさしく、戸田先生から拝受された日蓮仏法の根本義でございます。その、戸田・池田両先生が学会員に垂教された御義口伝、百六箇抄などの相伝書に依拠するのでは、普遍的な説明にはならないとの暴言は不知恩、忘恩の極みです。

この暴挙ひとつで、「教学要綱」及び男子部教学室は、創価学会会憲、総則第三条—「三代会長」は、広宣流布実現への死身弘法の体現者であり、この会の広宣流布の永遠の師匠である。（「教学要綱」200頁）—に、完全に違背しています。池田先生が、戸田先生から相伝書を垂教されたことは、「若き日の日記」に記されています。よって、次の3の論述に示しました。池田先生の青春の研鑽を、絶対に忘れてはいけません。

そして、池田先生の相伝書の解説である「御義口伝講義」「百六箇抄講義」こそが、日蓮本仏論の正義、真義を縦横無尽に教示された、まさしく、「重書中の重書」であるのであり、その中心と拝します。

以下、「百六箇抄」講義の論述を紹介します。ここに、釈尊の成道の経緯が、明確に解説されています。そして、これこそが寿量品の本意であり、日蓮本仏論であると拝します。

11 迹の本は本に非ざるなり

本果妙は寿量品に「我実に成仏してより已来」とある通り、釈尊の久遠五百塵点劫の成道を指している。この五百塵点劫は、釈迦仏法において、その最も遠い過去にまでさかのぼったものであるけれども、しかし、この五百塵点劫の本果も、久遠元初の自受用身如来の成道からみれば、なお迹門にすぎないということである。

つまり、日蓮大聖人の仏法からみれば、釈迦仏法全体が迹門となり、本果妙は、その迹門のうえにおける本門にすぎないのです。「迹の本は本に非ざるなり」とは、たとえ本果妙が釈迦仏法における本であっても、日蓮大聖人の独一本門の本ではないということです。故に、本果妙を究極とする釈迦仏法を「本果妙の仏法」と称するのです。

12 本の迹は迹に非ず

これに対して本因妙は、同じく寿量品に「我本菩薩の道を行じて」とある通り、五百塵点劫の本果を得るために衆生が行じた本因の菩薩道のことであります。しかし、この本因の菩薩道の文底に、南無妙法蓮華經が秘沈されていたことは、これまで何回も述べてきた通りであります。

日蓮大聖人は、釈迦が行じた本因の菩薩道における五十二位の段階のうち十信を経て十行の最初の位である初住位において、釈迦は南無妙法蓮華經を覚知して不退の境涯に入ったのであると洞察されております。

すなわち「我本行菩薩道」の本因妙は、その文底に妙法を秘沈しているが故に真実の本門、文底独一本門のうえの迹となると教えられているのです。同じ「我本行菩薩道」の本因妙の文を、五百塵点劫の本果のための本因妙と捉えれば「迹」にすぎない。だが、文底の南無妙法蓮華經を秘沈した文と捉えれば、独一本門の「本」に基づいた「迹」となるが故に「本の迹」となるのであります。これは、もはや単なる迹の域ではなく、本の迹となるとの意であります。それ故に、寿量品の本因妙を文底に見いだされた日蓮大聖人の仏法を「本因妙の仏法」というのであります。 一と。

(私見) 上記、池田先生のご教示で、「**教学要綱**」が**どれほど浅薄で、間違いの書**であるかが判明しました。皆様はこれのご指導を永遠に心肝に染めて頂きたい思います。

3.「**若き日の日記**」(現在、大白蓮華掲載中)より**池田先生が相伝書を研鑽されたこと**をご紹介します。2.と同じく、それらに反し「教学要綱」とそれを支持する男子部教室が**相伝を全く無視すること**への破折。



「**若き日の日記**」は、池田大作全集の36巻で昭和24年から30年までの日記、また、37巻で31年から35年の会長就任の5月3日及び、13日までの日記が掲載されています。

内容は膨大な量ですが、その中で、特に、**池田先生が相伝書を研鑽されたこと**を中心に抽出させて頂きました。また、その他、「立正安国論」「三大秘法抄」なども引用させて頂きました。

二十四年 (池田大作全集**36巻**に収録)

九月二日(金)台風

「**御義口伝**」を拝読。御義口伝に云く妙法蓮華經を安樂に行ぜむ事末法において今日蓮等の類いの修行は妙法蓮華經を修行するに難来るを以て安樂と意得可きなり。

二十五年

七月十四日(金)快晴 K 先輩, M 兄と共に「**御義口伝**」の読み合わせをなす。

九月二十八日(木)曇 「**三重秘伝抄**」講義拝聴。

二十六年

一月十七日(水)快晴 学会、戸田先生の「**立正安国論**」の講義開始。

一月二十四日(水)晴 「**御義口伝**」「**六卷抄**」拝読の事。

二月二日(金)快晴 戸田先生一「**御義口伝**」講義あり。

二月二十日(火)晴 「**立正安国論**」「**三大秘法抄**」をば、血涙の流れ出るまで、色読せねばならぬ。

三月二日(金)曇 夕刻、「御義口伝」の講義に出席。尚「顕仏未来記」の御書講義も含まれる「御義口伝」は世尊大恩の事。

三月二十三日(金)小雨 「御義口伝講義」、藥草喻品等。

三十年

二月二日(水)晴 六時より、教授会。非常に、神経疲れる。明日より、先生に左記の御書の教示をお願いする。一、百六箇抄 二、本因妙抄 三、御義口伝 四、観心本尊抄 五、開目抄 六、六卷抄

二月二十八日(月) 雨後晴 八時まで休む。勤行出来ず。六時、幹部会。豊島公会堂。終わって、大幹部会。常在寺。先生の、大幹部への指導たるや厳なり。

私は、私の力の限り、頑張ることだ。「本因妙抄」に曰く、仏界の智は九界を境と為し九界の智は仏界を境と為す境智互に冥薫して凡聖常恒なる是を刹那成道と謂う、三道即三徳と解れば諸悪慍に真善なる是を半偈成道と名く。生活が、日毎にきつくなる。題目を唱えることだ。十二時、帰宅。

三月一日(火)晴後雲 会長室にて、夕刻「百六箇抄」の講義を賜る。

十月五日(水)晴 六時より、会長室にて「御義口伝」の講義を受く。

十月二十八日(金)雨 一、御書を、完全に読み切ってゆく事。一、六卷抄を、熟読すべき事

十一月十日(木)雲後晴 「末法相応抄」につき支部幹部及び女子部幹部と語りあう。

三十一年 (ここからは、池田大作全集37巻に収録)

一月十六日(月)日本晴れ 六時半より、中之島公会堂にて、先生、第一回の

「方便品」の講義あり。参加受講者、何と七千人。真剣な眼差し。関西は益々進展してゆくであろう。東京を凌いで。夜行、大阪梅田駅十時発「月光」にて、帰京。一人で。車中休めず。繊細な神経か、青年詩人は。

十二月六日(木) 晴後曇 夜、自宅にて、H君等と「御義口伝」の講義を勉強す。寿量品を終わる。

三十二年

五月六日(月)曇 「御義口伝」の講義…再開。先生の名講義に、胸打たる。大哲学の、達観の力。悟達の境涯よりの言々句々。吾を恥じ、わが力を、嘆くのみ。

六月三日(月)晴後曇 夜、「御義口伝」の、講義あり。先生、無理をおして、全力をあげての講義。身の浅学を恥ず。

十月一日(火)曇 「三重秘伝抄」の「一念三千の数量を示すとは」の段。先生より、指導を受けしところなれば、確信ある講義となる。

十月七日(月)曇 「御義口伝」講義一本部一六時三十分より。「提婆品」「勸持品」「安樂行品」の三品であった。客観視して生命に約してゆく、先生の見事なる講義。

十一月五日(火)晴後曇 夜一講師会。「末法相応抄」四悉の例文より。みな、真剣。

十二月二日(月)曇 本部広間にて、「末法相応抄」を講義。幹部に厳しく当てて解釈させる。幹部、狼狽せり。

三十三年

二月九日(日)快晴 一時、本部にて「末法相応抄」講義。むずかしい。

五月十三日(火) 晴 本部に戻り、先生の講義を整理。「三大秘法抄」の意義。

六月八日(日)雨 午後「文底秘沈抄」の講義。法本尊の章、修了。後世畏るべし。

三十四年

十一月二十八日(土)晴 夜、「三重秘伝抄」の講義。一生涯、勉強せねばと痛感。慢々緩々、後悔の身になるらん。

三十五年

三月十七日(木)快晴 青年幹部と当院(歓喜寮)にて「六卷抄」を読む。皆、教学の鋭く進んでいることに驚く。後生、畏るべし。

(私見)以上、池田先生は、戸田先生から相伝書をご教示され、懸命に研鑽されたのです。それを無視した「教学要綱」と男子部教学室は言語道断です。 32/68

4.「教学要綱」の最大の誤り2つ、さらに、私が当初から持つ主要な5つの疑問、誤りに対し戸田先生の講義、池田先生のご指導等より破折する事。最大の誤り2つは以下です。

①28 頁で、如来寿量品における釈尊を4回も「永遠の仏」と記した誤り、また、

②78, 79 頁で、日蓮本仏論の完全否定となる大妄語、即ち、御本尊の相貌について「寿量の仏」を「釈尊」とした誤り—（これは、2. 16拙文の追考です。）

① について、

「教学要綱」の28頁には一如来寿量品では、**釈尊**は未来に向かっても、それ以上の長遠な期間に渡る寿命があることが示されている。すなわち、**釈尊の本来の真実の境地(本地)**は、無限の過去から**無限の未来**まで常に存在する「**永遠の仏**」であることが明かされている。(中略)「法華経」には、現実亡くなった歴史上の釈尊と「**永遠の仏**」としての**釈尊**の関係が示されている。すなわち、**永遠の寿命を持つ釈尊**は、実際に涅槃に入ることはないが、衆生に求道の心を起こさせ、修行に精進させるための方便として涅槃に入る姿を示す(方便現涅槃)ことが説かれている。その上で、久遠実成の仏は、実は娑婆世界に存在し続け、衆生が仏を求めて身を惜しまず仏道修行に励むならば、いつでも衆生のもとに出現するとされている。このような「法華経」の教説は、仏とは、単に歴史上の釈尊という個人のことでなく、**釈尊**がその身に現した仏界(智慧と慈悲に満ちた尊極な仏の生命境涯)という境地であり、それが**永遠である**ことを示していると理解できる。一と。

(私見)寿量品という根本の解釈で、1 頁内に**釈尊**を4回も「**永遠(の仏)**」と記し、また、**釈尊はいつでも現れる**などという既述、これでは身延の解釈と全く同じです。こんな教義の大変更を理由も全く記さず発刊し、更には、過日の教授講座で、H 教学部長は平然と「**教学要綱**」に基付きますと放言をすることは許せません。教授講座に参加した方々も、しっかり「**教学要綱**」を読んで欲しいです。そして、三代会長の、これまでのご指導と比較して下さい。「**釈尊が永遠の仏**」など、三代会長は一度も言われておりません。

このことについても、アマゾンの新刊書で、**中村誠著『創価学会教学要綱』の意味するもの**」にある以下論述が、正論と拝します。

『教学要綱』は「**釈尊の本来の真実の境地(本地)**は、無限の過去から無限の未来にまで常に存在する『**永遠の仏**』であることが明かされている」(『創価学会教学要綱』p28)と主張する。ところが池田先生は「しかし永遠性といっても、完全に永遠ではない。

どこまでも『有始(始めがある)』の仏です。だから無始無終の宇宙即妙法と一体とは言えない。『すき間』がある』(『法華經の智慧』第 5 卷, p. 277)と釈尊の無始無終を完全に否定している。『御義口伝講義』にも同様の主張が数多くみられる。また戸田先生も、「釈尊の本地は五百塵点劫であるが、日蓮大聖人の本地は五百塵点劫のそのかみ(それ以前)の久遠元初、すなわち無始の昔である」(『戸田城聖全集』第 5 卷 p. 460)と同様の主張をしている。

池田先生は、戸田先生の主張に忠実であったことがここから窺える。「池田大作監修」とされる教学要綱は、明らかに過去の池田先生の主張、そして戸田先生の主張と真っ向から対立しているのである。この矛盾はどう考えるべきだろうか。創価学会男子部教学室は、「(須田)氏は、日蓮大聖人は釈尊を超越した根源仏であると主張するが、これは宗門教学そのものであり、大聖人の御書や日興上人の著作に基づいたものではない」と反論している。しかしである。『人間革命』第 2 卷 p.221-222 で、山本伸一青年が戸田先生に折伏される場面では次のように戸田先生が山本青年に説いている。

「(南無妙法蓮華經)無作三身如来、すなわち根本の仏様のことであり、永遠に変わらない本仏の生命の名前です。釈尊滅後二千年以降、すなわち末法という時代にはいつては、その仏様は日蓮大聖人であり、その大聖人様は、御自身所有の久遠元初の生命と、力を、御本尊様に認められたのです。(略)難しく言えば、法本尊即人本尊で、人法一箇のこの御本尊こそ、南無妙法蓮華經の実体と言えるのです」

この戸田先生の折伏を受けて、山本伸一青年は、有名な詩を即興で作成するのである。ここから三代会長先生の広宣流布の歴史が始まるのであるが、日蓮大聖人を根本仏とするのが宗門教学だというのであれば、それでは戸田先生は池田先生に宗門教学である邪義を説いて入会に導いたのであろうか。「出鱈目を教えたら罰を受けるくらい知っているよ(戸田先生)」(『人間革命』第 1 卷 p. 213)とあるが、戸田、池田先生は長年、学会員に邪義を教えて罰を受けたのだろうか。なお、身延派は次のように主張している。

<http://www.homyou.hello-work.jp/ron63.html>

「釈尊が、無始より衆生を教導している久成釈尊である事を説くのが寿量品の主題です。だから大聖人は、釈尊の弟子本地上行菩薩として三大秘法の法門を教えていただいたのだと記しているのです」この身延派の主張は、先ほど引用した『教学要綱』の一節、「釈尊の本来の真実の境地(本地)は、無限の過去から無限の未来にまで常に存在する『永遠の仏』であることが明かされている」とほぼ同じであることが見て取れる。

即ち、戸田・池田先生の過去の長年の主張は全て誤りであり、池田先生は亡くなる一年位前に、戸田先生が犯した間違い、自分が過去に犯した間違いを改められ、今までの教学は全てリセットせよと命令して亡くなられたことになる。また、真実の御書解釈は大石寺ではなく身延派にこそ存在したことになるだろう。これで良いのだろうか。

釈尊の寿命とは有限なのであろうか、無限なのであろうか。『教学要綱』の主張と戸田・池田両先生の主張はどちらが正しいのか。これは法華経の原本に当たってみるほかない。釈尊の寿命が無限か有限かの決定的な答えとなるものは次の経文にある。「私(釈尊)がもと菩薩の道を実践して成就した寿命は、今日もなお尽きることなく、また上述の数の二倍の年数がある」(三枝充恵『法華経現代語訳』p. 372)

ここで非常に重要な点は、法華経が釈尊の寿命を二倍していることだ。教学要綱の主張するように、釈尊の寿命が永遠の過去から常に存在する仏であるならば、その寿命を二倍するという数学上意味のないことを法華経は行っていることになる。無限を二倍しても無限であるし、無限を無限倍拡大してもやはり無限であり、これほど無意味な操作はない。即ち、法華経を絶対視するならば、五百塵点劫とは無限に近い数ではあるが、その本質は有限でなければならない。そして、釈尊が菩薩の道を実践していたそれ以前は何をしていたかという、開目抄に「不軽菩薩は、過去に法華経を謗し給う罪身に有るゆえに、瓦石をかぼるとみえたり」とある。即ち、釈尊が謗法を犯していた時代に達する。これではとても永遠の仏とは言えない。

もう一度池田先生の主張を見てみよう。「(久遠実成の釈尊は)無始無終の宇宙即妙法と一体とは言えない。’ ’ すき間’ ’ がある」(『法華経の智慧』第5巻 p. 277)。正にその通りではないか。即ち、釈尊の寿命とは無限に近いとはいえ、その実態は有始有終の仏である。池田先生は次のように述べている。「では永遠の仏を説くにはどうすれば良いかというと、『仏因』に『仏果』を認めなくてはならない」(『法華経の智慧』第5巻 p. 212)。「この「因位(仏因の位)の仏」——それが上行菩薩です。『因果俱時の仏』です。

上行菩薩が出現しなかったならば、無始無終の本仏は示せないのです」(同書 p. 212-213)。即ち、究極の仏の形態とは、釈尊のような金ピカの仏ではなく、因果俱時の仏、菩薩仏でなければならないのだ。御義口伝にはこうある。「末法の仏とは凡夫なり、凡夫僧なり」。いかに池田先生の洞察が鋭いか、そして御義口伝の素晴らしさもこれで理解できるのではないかと思う。一方で『教学要綱』は何と述べているか。「永遠の仏」(p. 28)と説いておきながら、「釈尊をはじめとして、あらゆる仏は『法華経』によって仏となった」(p. 81)と言う。この支離滅裂さは一体何なのだろうか。

池田先生の『法華經の智慧』第 5 卷の言葉を借りるならば、『『仏因』が先にあって、『仏果』が後に来るというのでは、どうしても、' ' 何らかの時点で' ' 仏が出現することになる』(同書 p. 212) となる。『教学要綱』の主張は誤りである。もはやこの時点で学術書としては失格であり、また、今までの教学をリセットする価値など全くない、単なる邪宗身延の主張の劣化版であることがこれだけで証明されてしまったことになる。須田氏は『『創価学会教学要綱』と日蓮本仏論の考察』において、「久遠実成の釈迦仏は南無妙法蓮華經によって仏にさせてもらった仏であるから根源の仏ではない。また五百塵点劫という一時点において初めて成道した仏であるから無始の存在でもない」(同書 p. 16)と主張しているが、正にその通りだろう。『創価学会教学要綱』の主張は完全に間違っている。

男子部教学部は次のように主張する。『『教学要綱』では、論拠とする御書は、日蓮仏法の骨格というべき十大部を中心としている」。もしかして彼らは、十大部を使用して御書解釈すれば日蓮大聖人は無始無終の本仏で釈尊は有始有終の迹仏であるという答えは出ず、釈尊こそが無始無終の仏であるという答えが出るとでも考えているのだろうか。それは間違いである。それをこれから証明しよう。

「問うて曰く、教主釈尊は〈これより堅固に之を秘す〉三惑已断の仏なり。(略)本門をもってこれを疑わば、教主釈尊は五百塵点已前の仏なり。因位もまたかくのごとし。それより已来、十方世界に分身し、一代聖教を演説して、塵数の衆生を教化したもう」(観心本尊抄)。

五百塵点已前の仏とはあるが、その前に因位(修行時代)があることから、釈迦はどうしても始まりがある仏になってしまう。『教学要綱』が主張するような永遠の仏などでは決してないのである。なおこれは私の自己流の御書解釈ではない。全く同じことを池田先生その人が『御義口伝講義』上にてこの御文を同様に解釈されている。

池田先生は次のように言われる。「ここ(先ほど引用した観心本尊抄の御文)に釈迦仏法の相貌が伺えるのである。まさしく釈迦仏法は、長い間の仏道修行の仏因を経て、仏果を得るとするので、どこまでも因果異時となる。たとい、本門といえども、五百塵点劫以前に、菩薩道を長い間行じたとし、因果異時であり、本果妙の仏法となる」(同書 p. 76)「永遠といえども、いまだ五百塵点劫のように時を限定しているゆえに、いかにその時が長遠であっても、これでは本当の無始無終の生命観にはならない」(同書 p. 215)

法華經迹門は、三千塵点劫という久遠の昔、釈尊の師匠であり親であり主人であった大通智勝仏という仏を登場させているが、五百塵点劫という更なる長大な過去を寿量品で用意することにより、この師弟関係を覆して五百塵点劫成道の釈尊を法華經上では最高の存在にしている。しかし、それ以上の存在として、無始無終であり釈尊を仏ならしめた存在、即ち釈尊の師匠となる存在が法華經に秘されているのである。釈尊の師匠となる存在は、一応は文上においては釈迦の弟子の形をとるが、実は開目抄に釈尊の師匠であることが仄めかされている。その御文は「この大菩薩(地涌の菩薩)は彼等にはにるべくもなき、ふりたりげにまします。定めて釈尊の御師匠かなんとおぼしき」である。これは後に述べる。かくして、釈尊は有始有終の迹仏であるとこれで確定する。

それでは日蓮大聖人が釈尊を遥かに凌ぐ無始無終の仏であると説いた御文は存在するのか。それが次の御文になる。「我等が己心の釈尊は五百塵点乃至所顯の三身にして無始の古仏なり」(観心本尊抄)である。この「我等が己心の釈尊」の釈尊を文字通りインドの釈尊と解釈してはならない。ここでいう釈尊とは、大聖人とその弟子たちの己心の仏界を意味している。また「我等が己心の声聞界」、「我等が己心の菩薩」等は、大聖人とその弟子たちの十界の菩薩界、声聞界等の比喩表現であると言える。戸田先生は次のように講義されている。「この釈尊(我等が己心の釈尊)こそ久遠元初の自受用身(大聖人)にして報中論三の無作三身であらせられることは明白である。諸宗門の輩はこの無始の本仏を知らないから、当文の御深意に到達することができないので哀れむべき者である」(『戸田城聖全集』第7巻 観心本尊抄講義 p. 189)。

ここで疑問が生じる。五百塵点劫は無限に近い数ではあるが、法華經はこの数を二倍していることから、有限を表しているという結論が既に出ているが、なぜこの法華經の御文から無限が出てくるのか。この答えこそが文底の法華經である。

「その上、摩訶止観の第五の巻の一念三千は今一重立ち入たる法門ぞかし。この法門を申すには必ず魔出来すべし。魔競はずは正法と知るべからず」(兄弟抄)。この一念三千を単に奥深い法門と読んでではない。なぜなら大聖人の法華經は天台の摩訶止観ではないからである。「日興云わく、彼の天台・伝教所弘の法華は迹門なり。今、日蓮聖人の弘宣し給う法華は本門なり。この旨つぶさに状に載せ畢わんぬ。この相違によって、五人と日興と堅くもって義絶し畢わんぬ」(富士一跡門徒存知の事)。

なぜ大聖人の法華經は天台の摩訶止観ではないのか。その理由は、次の御文にある。「一念三千の法門は、ただ法華經の本門寿量品の文の底にしずめたり」(開目抄)。即ち、寿量品には文上・文底という二重の意味が存在しており、それが「一念三千の法門」に関わっているということだ。また、次の御書は非常に重要である。

「一念三千の法門をふりすぎたてたるは大曼荼羅なり」(草木成仏口決)、「一念三千を識らざる者には、仏、大慈悲を起こし、五字の内にこの珠を裹み、末代幼稚の頸に懸けしめたもう」(観心本尊抄)。即ち、御本尊については法華經寿量品の文底から説く必要があるということだ。ここに、法華經の文上を説いて釈迦の仏像を本尊とする五老僧と、法華經の文底を説いて文字曼荼羅を本尊とする日興上人の重大な相違があると言える。そして、観心本尊抄は御本尊とは何かを説明している御書なので、先程の十界、即ち一念三千を表す御文は寿量品を文底から説いたものであるということが言えるだろう。だから、文上の寿量品の釈尊は有始有終、文底の寿量品の大聖人とその弟子たちは無始無終となるのである。

上記、戸田・池田先生のご指導と、中村誠著『創価学会教学要綱』の意味するものからの論述により、「教学要綱」が記す「釈尊は永遠の仏」との論述は、法華經文上解釈自体が成立しない、全くの誤りであると断じます。そして、「教学要綱」が寿量品での釈尊を「永遠の仏」と4回も記したこと(27-29頁)は、結論、日蓮大聖人を否定した勤行(寿量品の読誦と唱題)になってしまうのだと断じます。

② については、

「教学要綱」の78頁には一大聖人が顕わされた文字曼荼羅の御本尊は、上行等の四菩薩が釈尊の脇土となっているので、この釈尊は『法華經』本門寿量品における釈尊、すなわち「**寿量の仏**」である。さらに、その「**寿量の仏**」そのものが、首題の「南無妙法蓮華經」の脇土に位置づけられている。これは、「南無妙法蓮華經」こそが、すべての仏を生み出した能生として、根本の本尊たるべきことを示している。—とあります。

(私見)この記述も、「教学要綱」における最大の誤りです。「**寿量の仏**」の誤りに対して、戸田先生は、全集七巻 219 頁で一本尊の為体はまったくこれ「久遠元初自受用身の当体の相貌であるゆえに、いま「寿量の仏・此の仏像」というのである。

また、同 221 頁では一身延等の文底下種の「仏法を知らぬやからが色相莊嚴の釈尊をつくって、あえて間違いとしない理由は、「寿量品の仏」および「此の仏像等」というのを本門寿量の教主釈尊であって、色相莊嚴の画像・木像であると解しているからである。—と破折されています。

また、『日寛上人文段集』502頁には、「謂く、前に明かす所の本尊の為体、一毫も動かず、全くこれ久遠元初の自受用身の当体の相貌なり。故に今「寿量の仏乃至此の仏像」というなり」とあります。これは日寛上人が「寿量の仏」について、人法体一の意義から曼荼羅本尊の姿は全く久遠元初の自受用身であると言われているのです。

さらに、中村誠著『創価学会教学要綱』の意味するもの』には、次のように記されています。

一池田先生が日寛上人の末法相應抄について『御本尊根本』『御書根本』の正義を明示される』と断定されました。それでは日寛上人の末法相應抄では観心本尊抄の「寿量の仏」はどう説かれているか。

「寿量品の仏とは即ち是れ文底下種の本仏、久遠元初の自受用身なり。既に是れ自受用身の故に亦また『仏像』と云うなり。自受用身とは即ち是れ蓮祖聖人なるが故に出現と云うなり」(末法相應抄)とあります。何という素晴らしい解釈ではないでしょうか。この方は名法主と呼ぶにふさわしいと思う。

最後に、それでは『教学要綱』以前の創価学会の解釈はどうか調べると、「ここで『寿量の仏』と言われているのは、寿量文底下種の法、すなわち寿量品の文の底意として示され末法の人々に説き示して信受させるべき法を体現している仏という意味である」(創価学会教学部『観心本尊抄』 p. 186)とあります。

即ち、「寿量の仏」とは、文底の教主釈尊であられる大聖人のことであるとし、完璧な答えが述べられている。これこそが私が長年に渡り信頼してきた、世界に誇るべき創価学会の姿ではないでしょうか。それが 2023 年の教学要綱以降ガラリと変わります。この変化は異常です。一と。

* * *

これらの教示により、結論として、日蓮は釈迦仏を本尊としないので、ここで言う『寿量の仏』とは久遠実成の釈迦仏ではなく、寿量品が暗々裏に示した根源仏と解さなければならぬのです。

そして、また、私は、結論、「教学要綱」の最大の誤り—「寿量の仏」を釈尊とすることは、「新版 法華経 方便品・自我偈講義」が「良医」を釈尊にすることと、根底で繋がっていると判断します。

次に、私が当初から「教学要綱」へ持つ、以下、主要な5つの疑問、誤りについては、**戸田城聖全集**からご指導を引用して、破折します。

①. 釈尊の”成仏した本因”を明かさないこと。

「久遠元初の自受用報身が現れれば、あらゆる仏は、久遠元初の自受用報身の垂迹仏になるのであります。みな南無妙法蓮華經から出生した仏になるのであります」(『**戸田城聖全集**』第 5 卷 355 頁)。

「久遠実成の釈迦如来は、我本行菩薩道において、南無妙法蓮華經を修行したことは歴然としています。ただ化導にあたっては、釈尊は南無妙法蓮華經とはいわないのです。法華經二十八品をいったにすぎないのです。南無妙法蓮華經は、その釈尊の所有物ではありません」(第 6 卷 474 頁)

戸田先生の5巻「方便品寿量品講義」376頁には 一大聖人は、久遠元初の自受用報身如来であられます。それが第一番には五百塵点劫の**釈尊**と現れ、あらゆるところに久遠元初の自受用報身如来の慈悲を垂れられ、衆生を見られて、特にこの末法へ大聖人がお現われになった。この原理は五百塵点劫に仏がおった。その中間には、然燈仏(ねんとうぶつ)があり、その然燈仏と関係した儒童菩薩が**釈迦如来として生まれた**。

われわれが大聖人を拝し奉れば、末法になってお現われになったのだと思うが、本当はそうではないのであります。久遠元初という時に、すでに地水火風空なりと知(しろ)しめして即座にお悟りになった仏なのであります。それが種々の仏として、ご自身がお出ましになり、迹を垂れられ、使いをよこされた。そうして末法には、ご自身がここへお現われになった。中間の仏はことごとく、わが分身仏であり、迹仏であります。みな久遠元初の自受用報身如来の息のかかったものであります。末法に大聖人が出現されたことについては、この ように拝さなければなりません。— との、深いご教示があります。

②. 「**日蓮＝久遠元初自受用報身如来＝南無妙法蓮華經＝人法一箇の御本尊**」を記さず、大聖人は単に釈尊から託された「南無妙法蓮華經」を弘める菩薩(91頁)とすること。

「久遠元初の自受用報身が現れれば、あらゆる仏は、久遠元初の自受用報身の垂迹仏になるのであります。みな南無妙法蓮華經から出生した仏になるのであります」(第 5 卷 355 頁)。

(質問会で) 私たちが拝んでいる御本尊様のお文字が、久遠の儀式であるということをはかっています、どういうわけでしょうか。—について、

— **御本尊が久遠の儀式**であるとは— 一応は久遠の儀式の姿が、ここに現されているのです。しかしそれは、そのまま日蓮大聖人様のご生命であり、大宇宙の生命であり、われわれの生命ではありますけれど、それが一応の形は、南無妙法蓮華經日蓮とあります。

南無妙法蓮華經とは久遠元初の自受用報身如来、日蓮とはその久遠元初の自受用報身如来と同じ方です。ですから南無妙法蓮華經日蓮とあるのです。南無妙法蓮華經仏とはすなわち日蓮なり、と読んでもいいのです。

日蓮大聖人様が真ん中にデンとお坐りになっているのです。その右側に多方如来様が坐っています。**左側に釈迦牟尼世尊が坐っています。**そうするとこの後のほうに、ずーっと分身の諸仏が集まっています。梵天にとどくほどずーっと階段のようになっているのです。たとえていうと、国技館の座席みたいになって集まっているのです。

そのまえには地涌の菩薩の棟梁、上行菩薩、無辺行菩薩が多宝の方に向かいあっているのです。こちらのほうには安立行、浄行様が御坐りになっています。その地涌の菩薩としてわれわれが雲霞のごとくずーっと並んでいるのです。われわれもそこへ坐っていたのです。ボヤボヤして後のほうで居眠りなんかしていた人が、いまになって教学がわからないのです。

その次には、薬王菩薩、文殊、それから弥勒、こちら側には文殊の次は普賢です。観音もきているし、その他の菩薩がずーっと並んでいます。その次には、舍利弗、目犍連、そのほかに声聞階級が並んでいます。その他の天、竜、夜叉、乾闥婆、迦楼羅、迦楼羅、摩睺羅伽、緊那羅という連中が雲霞のごとく並んでいるのです。そして、南無妙法蓮華經と唱えた儀式が、御本尊の儀式になっているのです。

だから、**あなたが題目を唱えるのは、その地涌の菩薩の中の一人として、あなた方はいま唱えていると思っているでしょうけれども、じつは久遠元初以来、日蓮大聖人様に向かって題目を唱えてきているのです。**そういうわけですよ。(第2巻38, 39頁)

(**私見**) 戸田先生の講義録の中でも、一番、重要であり、分かりやすいご指導です。この論述こそが「**日蓮＝久遠元初自受用報身如来＝南無妙法蓮華經＝人法一箇の御本尊**」そして、**私たちの本地**をご教示されていると拝します。

末法の仏様は、久遠元初の自受用報身如来、またの名は、南無妙法蓮華経様という仏様であります。この仏様の御力は、宇宙大の御力を持ち、宇宙それ自体であります。永遠の御力を持ち、あらゆるものを変化させていく御力をもった仏様であります。**この仏様は、垂迹として、釈迦の法華経では上行菩薩となり、末法では日蓮大聖人として再誕されたのであります。**これがわからないのが、中山、身延、交正会等の邪宗であります。」(第4巻 34 頁)

無始無終より南無妙法蓮華経を所持なさる日蓮大聖人こそ御内証は久遠元初の自受用身であられることはいうまでもない。我らが本法を受持し、元品の無明を対治して成仏するのも、この**人法一箇の大御本尊**を信じたてまつる以外にないのである。(第六巻の開目抄講義 287 頁)

「大聖人の凡夫の御身が即久遠元初の自受用身と顕れ給う」(第6巻 371 頁)。

③. 「人本尊」と「法本尊」、御本尊の相貌の根本義**「人法一箇」を一切記さないこと。**

人法一箇とは、仏法の大眼目であり、正邪の判別はこれにある。南無妙法蓮華経即日蓮大聖人であるにもかかわらず、邪宗では、南無妙法蓮華経の法を立て、久遠実成の釈迦を人に立てている。**人法のそろわぬことは大問題である**」(第4巻 67 頁)。

④. 大聖人の竜の口法難での**「発迹顕本」の真義を論述しないこと。**

由比ヶ浜辺の首の座より**無作三身自受用報身を証得して、その御内証は寿量品の文底下種・事行の一念三千の南無妙法蓮華経**である。されば大聖人は脱益寿量文底の本因妙の教主であらせられるから、一切経を読まずとも、一切経の仏菩薩が大聖人に随従し、かつ一切経の功德が大聖人に雲集しているのである。(第6巻開目抄講義 356 頁)

丑の刻はすなわち陰の終わり、寅の刻はすなわち陽の初めであり、死の終わり生の初めで、すなわち正死の間である。ゆえに御書には「三世諸仏の成道はねうしのをわりとらのきざみの成道なり」(御書全集 1558 頁)と。ゆえに子丑の刻は大聖人の凡身が死にいたる終わりであり、頸を刎ねらるる寅の刻は久遠元初自受用身の生の始めである。

房州日我の本尊抄見聞には「開目抄に魂魄佐渡に到るとは凡夫の魂魄に非ず、久遠名字本仏の魂魄なり」といっている。釈迦は二月八日、明星の出る時大悟し、大聖人はまた九月十二日、明星の輝く寅の刻に**久遠元初の御本仏と顕れ給うた**のである。(第6巻 開目抄講義 371 頁)

「このとき(竜の口の法難を乗り越えられた時)に、初めて上行菩薩の垂迹の姿を捨て、久遠元初自受用身如来の姿を顕わされるのです。これ以降はすべての御振る舞いが仏なのです。その前は上行菩薩の再誕です。今後は久遠元初自受用身如来の御境地を顕わされるのです」(第7巻 種種御振舞御書講義 561頁)

⑤. 三宝の法宝は「御本尊」を削除して「南無妙法蓮華經」に変更し(156頁)、僧宝は日興上人を削除して「創価学会」に変更(156頁)、一大秘法も「本門の本尊」を突如「南無妙法蓮華經」に変更したこと(158頁)。(また、それ等全てに理由がないこと。

「仏法には三宝といいまして、**仏の宝、法の宝、僧の宝**がかならずなければなりません。(中略)法華經の迹門では、仏宝は始成の釈尊、法宝は法華經、僧宝は普賢文殊菩薩となります。(中略)これに対して、ただ一つ日蓮大聖人の正法正義では、**法宝は三大秘法の南無妙法蓮華經、仏宝は全世界でただお一人、南無妙法蓮華經を弘められた久遠元初自受用報身たる御本仏日蓮大聖人、僧宝は日蓮大聖人の仏法を正しく承継された御開山日興上人となっているのであります**。しかるに、邪宗日蓮宗のやからは、文上の釈尊を仏宝とし、法宝をば南無妙法蓮華經、僧宝をば日蓮大菩薩とし、人即法の法理を無視した邪説を唱え、仏法の根幹を誤るがゆえに、一切の法を誤り、功德がないどころか大罰をまねいている現状であります。これ恐ろしき日本の仏法の乱れであります。(第5巻264頁)

「南無妙法蓮華經とは一大秘法で、これを開いては三大秘法となる。三大秘法合してまた一大秘法となる。**一大秘法とは、本門の本尊**であり、この本門の本尊をひらければ、本門の本尊、本門の題目、本門の戒壇となる。又この本門の本尊、本門の題目、本門の戒壇を合すれば、**一大秘法たる本門の本尊**となる」(第3巻 佐渡御書を拝して、253頁)

「**南無妙法蓮華經と唱題するなかに三秘が備わっているというときは(略)儂き邪宗の教学である**」(第4巻266頁)。—この論述は、昭和30年3月11日の小樽問答を終えての戸田先生のご指導です。(3月13日の「小樽問答誌」掲載) * 三秘とは三大秘法のことです。

(私見)これは戸田先生の日蓮宗身延派への破邪顕正の獅子吼で、「**教学要綱**」が**一大秘法も「本門の本尊」を突如「南無妙法蓮華經」に変更**したことへの誤りを、完全に破折されていると拝します。つまり、題目である南無妙法蓮華經に三秘が集約されるとした身延派への破折です。これは、現在にも当てはまるご指導でございます。

大聖人の法門に一大秘法、三大秘法、六大秘法の開合ということがある。一大秘法とは南無妙法蓮華經の本尊で、この一大秘法を開いて三大秘法となる。三大秘法とは、この本尊に向かって唱題したてまつり題目と、この本尊のおわす場所たる戒壇である。すなわち本尊、題目、戒壇が三大秘法で、この三大秘法を開けば六大秘法となる。六大秘法とは、本尊に法本尊あり、人本尊あり、題目に信の題目、行の題目あり、戒壇に義の戒壇、事の戒壇がある。この六大秘法合して三大秘法となり、三大秘法合して一大秘法となる。(全集第6巻開目抄講義 312頁)

また、全集第七巻64頁で、戸田先生は「観心本尊抄」について、次のように記されています。私見、この論述は本門の本尊が一大秘法であることを述べられていると拝しております。その記述は一当抄の題号に多くの意を含む。いま日寛上人の御釈を略して示す。

1. 三大秘法を含む。―「如来滅後五の五百歳に始む」とはすなわち正像末弘の意である。「**観心**」の二字はすなわち題目である。そのゆえは本門の題目とは、ただ本門の本尊を信じて南無妙法蓮華經と唱えたてまつることであり、今この観心もまた本尊を信じて南無妙法蓮華經と唱える義であるから、観心即題目である。本尊の二字はまさしくこれ本門の本尊であり、その本尊初住のところは本門の戒壇である。ゆえに当抄の題号は正像末弘の三大秘法抄である。

5. 決定作仏の義を含む一如来滅後五五百歳に「始む」とは、すなわち末法下種の教主・本地自行の真仏無上の仏力である。「本尊」とはすなわち久遠元初自証の本法・尊無過上の法力である。「**観心**」とはわれら衆生が本尊を信じたてまつり、**南無妙法蓮華經と唱うる義であるから、信力、行力ではないか。**信力・行力・仏力・法力とは決定成仏の義をあらわすのである。

(中略)鳳凰は樹を選んで栖み、賢人は主を選んで仕えるという。仏法を学ぶ者がどうして、本尊を選ばないで信行できようか。**もし正しい本尊でなければ、たとえ信力・行力を励んでも仏種を成ずることはできない。**当抄をよくよく拝して、**法華經文上・熟脱教相の本尊を簡別し、下種観心の本尊を肝に銘ずべきである。**この御本尊は三世の諸仏の御師であり、八万宝蔵の肝心であり、正中の正鏡、妙中の妙鏡である。ゆえにこの御本尊を一念も信解する功德は五十展転の功德にも超え、「妙法経力、即身成仏」といわれるのである。ゆえに**この御本尊は最極無上の尊体**であらせられ、尊無過上の力用があらせられるのである。末法の今日において仏道を修行せんとする者は、すべから**く信力・行力の観心**を励むべきである。―と。 44/68

(私見)戸田先生の上記ご指導は、**本門の御本尊が根本**であり、それを拝して、観心である**題目「南無妙法蓮華經」**を唱えることが大事であるとの意であり、**即ち、三大秘法は一大秘法である「本門の本尊」に収まる**との意義が、ここに記されていると拝します。

「教学要綱」は、一大秘法を、それまでの「本門の本尊」から、突如、理由も記さずに、「南無妙法蓮華經」に変更しています(158頁)。このことにつき、ある学会員の考察が、非常に分かり易いので、以下、紹介させていただきます。正論と拝しています。

教学について、日寛上人や池田先生の指導や解釈は種々ありますが、「**教学要綱**」(以下「**要綱**」と略)は、それらを多分にさしおいて、我見の主張を展開しています。先師たちの指導とちがうではないか、と論難することはできますし、それも必要なことですが、「**要綱**」は批判を無視し、「学問的」を偽装して稚拙を開陳しています。

大聖人の真意と整合するか否かという点を精査することが本質的に重要になります。「**要綱**」は、「**曾谷入道殿許御書**」では一大秘法は「南無妙法蓮華經」であることが明確に示されている。」と言い訳していますが、それは御書のどこにも書かれていません。「要綱」がそう示されていると解釈しているに過ぎず、実際には明確に示されてなどないのです。

曾谷入道殿許御書では、一大秘法が出るくだりで、所属の法は「**妙法蓮華經の五字・名・体・宗・用・教の五重玄なり**」と明かされますが、重要なことは、それを御本尊の相貌(虚空会の儀式)を説かれながら示されている事です。ここからは、“一大秘法は本門の本尊とは解釈できない”とは言えません。大聖人は妙法五字七字と虚空会の儀式と本尊とを関連づけて、御書の各所で説かれています。曾谷入道殿許御書の他には、観心本尊抄、報恩抄、御本尊相貌抄、諸法実相抄。これらの御書を照らし合わせると真実が理解しやすくなります。

曾谷入道殿許御書においても、御本尊を示唆していると考えられます。観心本尊抄送状に「**此の事日蓮身に当るの大事なり之を秘す、無二の志を見ば之を開拓せらる可きか、此の書は難多く答少し未聞の事なれば人耳目を驚動す可きか、設い他見に及ぶとも三人四人坐を並べて之を読むこと勿れ**」とあるように、御本尊のことはあまりにも尊貴であり重大であるため、大聖人は軽々しく明かされなかったのです。

曾谷入道殿許御書で一大秘法が語られるくだりでは、「本尊」は出てきませんが、その虚空会の描写を含む御指南は、観心本尊抄での類似の御指南と照らせば、御本尊を指し示していると解釈できます。御文をありのままに拝読すれば、大聖人は曾谷入道殿許御書で「妙法蓮華經(南無妙法蓮華經)＝一大秘法」とは書かれておりません。そこでは明確ではなく、「妙法蓮華經(南無妙法蓮華經)＝一大秘法」自体が、「要綱」によるひとつの解釈に過ぎないのです。

「一大秘法を留め置きたもう」の直後に「**いわゆる…**」とありますから、その「**いわゆる…**」以降を一大秘法と解釈することも可能です。

「**いわゆる…**」以降を単なる一大秘法を留め置かれた具体的な場面、虚空会の儀式の説明、と断定的に解釈してはいけません。解釈の幅にゆとりをもたせるべきです。

「**いわゆる…**」以降は御本尊の相貌に相当する大事な記述であり、単なる一大秘法を留め置かれた具体的な場面、虚空会の儀式の説明、と解釈するのは、御本尊御図頭に尽力された大聖人のご生涯や、観心本尊抄の意義を軽んじることに通じてゆきます。「**留め置いた一大秘法**」を「**所属の法**」に限定して解釈してもいけません。

それをすると、「**所属の法**」=「**妙法蓮華經の五字、名・体・宗・用・教の五重玄**」であり、よって、一大秘法=南無妙法蓮華經、と結論づける流れになっていきます。しかし、「**留め置いた一大秘法**」は「**所属の法**」に限定はできません。**曾谷入道殿許御書だけを拝読しても、一大秘法が指し示す範囲が何なのか、文章の構造上、明確ではないのです。明々白々とは言えません。**そこで、他の御書と照らし合わせつつ、解釈を試みてゆくことになります。

その前に、そもそも、「一大秘法」との言葉の意味をより深く探求する必要があります。秘法という言葉は御書の各所にありますが、一大事の秘法、一大事の秘伝、第三の秘法、肝要の秘法といった一大秘法の類似語があります。一大秘法を含め、それらが同じ意味か、違うか、部分的に同じか等の分析が必要です。また、法宝とは何なのか、何を置くべきなのかを、丁寧に考えて理解してゆく必要もあります。

今日の学会教学では、一大秘法だけを法宝に掲げていますが、その根拠が不十分です。「三大秘法では何故いけないのか？学会が定義する一大秘法では題目の意味がわからないではないか？」等の論難が出ます。

さて、報恩抄では「問うて云く天台伝教の弘通し給わざる正法ありや、答えて云く有り求めて云く何物ぞや、答えて云く三あり、末法のために仏留め置き給う迦葉・阿難等・馬鳴・竜樹等・天台・伝教等の弘通せさせ給はざる正法なり」とあり、仏が留め置いた正法は3つあると仰せです。それは三大秘法です。

報恩抄と曾谷入道殿許御書を見比べてみると、前者の三大秘法(実際の記述は、本尊・戒壇・南無妙法蓮華經)を後者では一大秘法と読み換えていると解釈することも出来ます。その方が、一大秘法を、「要綱」のように、より教義(南無妙法蓮華經に限定)に用いていると解釈するより自然だと思われます。そのことは三大秘法抄ではよりクリアですが、「要綱」ではその御書を差し置いています。

さて、法宝には何を立てるべきでしょうか。「大秘法」とされる一大秘法であり三大秘法が相応しいでしょう。御本尊には本尊・戒壇・題目の意義が同時に含まれます。

日寛上人は三大秘法総在と表現しましたが、その通りです。御本尊を法宝と立てれば、一大秘法も三大秘法も同時に明示できます。さらに、御本尊の重要性和、日興上人が大聖人自筆の御本尊に『**重宝**』と記された意義を宣揚できます。

一方、「要綱」は、一大秘法を題目と定義し、御本尊を削って題目だけ法宝にした為、大聖人が御本尊を顕された意義が隠されました。 曾谷入道殿許御書だけからは一大秘法の言葉の意味を確定不可能。もし、一大事の秘法の意なら、仏がこの世に出現した根本目的の秘法と考えられ、三大秘法でありそれを凝縮した御本尊となり、一番目の「大秘法」との意なら、やはり御本尊、一つの大秘法の意なら、南無妙法蓮華經のみ指すとしても構いません。

「要綱」の問題は、本来、一大秘法の言葉の意味も、それが何を指すかもままならないのに南無妙法蓮華經とだけ定義し、さらに問題なのは、そのことによって、法宝から御本尊を削除し、後付けの説明に置いて済ませることで、御本尊を軽蔑してしまったことです。すなわち大謗法です。

長くなりますが、さらに、一大秘法と本門の本尊に関して補足します。大聖人の有力な弟子であった曾谷入道は、観心本尊抄を大聖人から読むことが認められた一人です。その2年後に曾谷入道殿許御書をいただいています。観心本尊抄と曾谷入道殿許御書は内容が似ていますが、決定的な違いがあり、そこが重要な点でしょう。それは、観心本尊抄では地涌の菩薩が出現して本尊を立てると明かされましたが、地涌の菩薩が誰かは示されませんでした。

一方、曾谷入道殿許御書において、「予地涌の一分に非ざれども、兼ねて此の事を知る故に、地涌の大士に前立ちて粗五字を示す」と述べられ、事実として地涌の菩薩が行うべき振る舞いを大聖人が行なっていることを示されることで、大聖人が地涌の菩薩であることを示唆されているのです。大聖人は実証主義であり、これが事行の一念三千のありかたと拝せましょう。曾谷入道殿許御書では、一大秘法との言葉が何を指すのか確定しがたいです。

一方、観心本尊抄では、「此の本門の肝心南無妙法蓮華經の五字に於ては仏猶文殊薬王等にも之を付属し給わず何に況や其の已外をや但地涌千界を召して八品を説いて之を付属し給う」と明かされ、この部分は、曾谷入道殿許御書での所属の法が南無妙法蓮華經であることを示された部分と同様です。

観心本尊抄ではその直後に、「其の本尊の爲体、本師の娑婆の上に宝塔空に居し、塔中の妙法蓮華經の左右に釈迦牟尼仏・多宝仏釈尊の脇士上行等の四菩薩文殊弥勒等は四菩薩の眷属として末座に居し述化他方の大小の諸菩薩は万民の大地に処して雲閣月卿を見るが如く、十方の諸仏は大地の上に処し給う述仏述土を表する故なり。是くの如き本尊は在世五十余年に之れ無し八年の間にも但八品に限る。正像二千年の間は小乗の釈尊は迦葉阿難を脇士と爲し、権大乘並に涅槃法華經の迹門等の釈尊は文殊普賢等を以て脇士と爲す。此等の仏をば正像に造り画けども未だ寿量の仏有さず、末法に來入して始めて此の仏像出現せしむ可きか」と、南無妙法蓮華經の本尊の相貌と、その本尊が末法に出現することを示されました。さらに後に地涌の菩薩がそれを成すことを明示されています。

この意義を理解するならば、曾谷入道殿許御書において、「一大秘法を留め置きたもう、所謂法華經本門久成の釈尊宝浄世界の多宝仏高さ五百由旬広さ二百五十由旬の大宝塔の中に於て二仏座を並べしこと宛も日月の如く十方分身の諸仏は高さ五百由旬の宝樹の下に五由旬の師子の座を並べ敷き衆星の如く列座したもう…」のくだりで、御本尊の相貌が語られている重大事を認識できますし、さらに地涌の菩薩に南無妙法蓮華經が付属され、末法に出現することを示されていることから、観心本尊抄で、地涌の菩薩が御本尊を立てると明かされた内容を想起させる文脈となっているのです。

大聖人にとって御本尊を立てることが、重要な目標であったことは明白です。大聖人は、竜の口の法難の直後においても、いまだ出世の本懷を遂げたとは言われませんでした。これは重要な点で、御本尊を御図顕され、完成され、令法久住の体制が整った後に、出世の本懷を遂げたと宣言されたのです。「要綱」は、その意義を忘れ、輕んじて、一大秘法を題目に限定して語って法理を矮小化し、さらに法宝から御本尊を削除して後付けにすることで、御本尊を愚弄したのです。 48/68

ちなみに、曾谷入道はその後、建治年間に至っても、迹門不読の僻見を抱いて、大聖人から「**不相伝の僻見**」と厳しく戒められています。せっかく大聖人から重要な御書をいただいたのに、なんとも情けない限りですが、わからない人はどんなに幹部になってもわからないということでしょう。六卷抄と報恩抄文段を粗見る限り、日寛上人は一大秘法=本門の本尊=一大事の秘法としました。一大秘法の言葉の由来は報恩抄文段で太田抄(曾谷入道殿許御書)を引用していますから、この御書中の一大秘法が本門の本尊を指すとしています。その日寛上人の一大秘法の解釈・定義は、他の御書と照らして、問題があるとは言えません。

大聖人ご自身が曾谷入道殿許御書において、どのような意味で一大秘法との言葉を使われたのかはわかりません。例えば一つの大秘法の意なら、南無妙法蓮華經のみ指すとしても構わなさそうですが、まず考えにくいです。**結論として、日寛上人が一大秘法=本門の本尊としたことは合理的。「要綱」の定義は不合理です。**

日寛上人は本門の本尊に三大秘法惣在の義があるとしました。「**要綱**」p.150 では、日寛上人が「戒壇の本尊」のみを「三大秘法惣在の本尊」と名づけたかのように書かれていますが、これは誤解です。日寛上人の諸抄をきちんと読めば、弘安二年の戒壇の本尊に限らず、本門の本尊は三大秘法総在の本尊であることがわかります。

このような「**要綱**」の無知が、教学改定の動機の一つだったとしたら情けないことです。学会員にとって、大聖人が前代未聞等と言われて重視された御本尊が一番大事であることは自明のことであつたはずですが、「**要綱**」が**浅薄な己義を構えて、法宝から御本尊をいともたやすく削り取る大謗法を犯したのは驚きでした。**

天台、伝教の教団があつという間に邪教と化し、大聖人亡き後、日向が身延を乗っ取ったことと同様のことが、現在起こっていると言えます。ありえないようなことが起こるのは一つの原理で、多くの人がありえないと思うから、そこに隙もでき、魔が跋扈するのでしょう。一と。

5. まとめと、所感

ここまで「新版 法華經 方便品・自我偈講義」の重要文の削除、変更箇所の追加抽出から始まり、順に、その最悪事である「**良医**」を**釈尊とした詭弁**への破折、戸田城聖先生の講義の偉大さの確認、戸田・池田両先生のご指導と「**若き日の日記**」より拝する相伝書と日寛教学の絶対的重要性、「教学要綱」の主要な誤りに対して破折など、5つの内容で論じました。

そして、最後、まとめとして以下の5つ—

- ① 日興門流の正義と相伝書の重要性の再確認
- ② 須田晴夫氏の著作の正義とその先見性について
- ③ 戸田先生の講義とご葬儀に、私は母と共に参加、参列出来たことへの想い
- ④ 「法華經の文底」の真義を知ることの意味と重要性について
- ⑤ 「教学要綱」を絶版にすべき理由—について記します。

① 日興門流の正義と相伝書の重要性の再確認

池田先生は、昭和35年5月3日、会長就任式の挨拶の最後で、以下述べられました。

— 今、創価学会は二祖日興上人様の、大聖人様のお教えを正しく奉持しゆく精神、お守り申し上げていく精神、そしてまた、老齡七十幾歳にして国家諫暁すること数十度、あくまでも、実践をあそばされた日目上人様の御精神、そしてまた、全邪宗教を打ち破っていく日蓮大聖人様の大生命哲学を、そのまま御解明くださった日寛上人様の絶対なる教学の深遠なる精神、その精神を精神として、広宣流布をめざして、そのまた、一目標である七回忌をめざして、進んでいきたいと思ひます。以上をもって講演といたします。— と。（補足、戸田先生の七回忌です。）

（私見）これが、池田先生が日興門流の正義と日寛上人の教学を、最初から尊重、用いられたことの証明なのです。そして、その7年後、昭和40年発刊の「御義口伝講義」冒頭には、池田先生の一この講義は文底からの講義であるとのご宣言があります。

— 法華經は、末法の御本仏の三大秘法流布の予言書として、初めてその意義がある。さらに本門寿量品の文底に、三大秘法が秘し沈められていて、本迹二門とも、この三大秘法の義によって、文を判じなければならない。三大秘法を知らずして法華經の文に執着するのは、天の月を知らずして、ただ池の月を見て、その池の月を取ろうとして、水に溺れるようなものである。このような関係は、御義口伝においてもっとも明らかである。御義口伝を拝読することは日蓮大聖人の仏法の真髓を拝することになるとともに、また釈尊の一大仏教を知ることにもなるのである。—と。

また、戸田先生の日寛上人の教学の正義を承継されて、池田先生は次のように述べられています。（1987.8.15 スピーチより（池田大作全集第 69 卷）

— 戸田先生はよく「教学は日寛上人の時代に帰れ」といわれた。ご存じのように、**日寛上人**は『**六卷抄**』を著されている。この『**六卷抄**』について、**日寛上人**はみずから「**此の書 六卷の師子王あるときは国中の諸宗諸門の孤兎(こと)一党して当山に襲来すといへども敢て驚恐(くふ)するに足らず**」(富要五卷)と言われている。まさに日寛上人は『**六卷抄**』で、大聖人御入滅後、約四百年間に発生した邪義を、ことごとく打ち破り、大聖人の正義を内外に宣揚された。 —

さらに、池田先生は「**本因妙抄**」について、以下、述べられています。

「**本因妙抄**(法華本門宗血脈相承事)」(全集 870 頁)では、大聖人の法門と釈尊・天台の法門との勝劣を明かし、寿量文底の秘法である事の一念三千の南無妙法蓮華經こそが、末法の衆生を即身成仏させる大法であることが示されている。

このように、**日興上人に付嘱された法門は、すべて人法一箇の大御本尊を指し示されたもの**であり、その裏付けとなる法理と拝される。

大聖人独自の御法門である文底下種法門も、第二十六世**日寛上人**が、「**六卷抄**」や御書の文段等で、体系化され、明確にしてくださっている。「**六卷抄**」は、昔は相伝書に準ずる秘伝書のように扱われ、許された一部のみにしか読まれなかったようだが、今では、だれもが学ぶことができる。**戸田先生**は、戦後、学会再建にあたって、(中略)「**六卷抄**」や文段を会員に学ばせて、教学力を深化させた。いわば、**秘伝や奥義とされがちであった大聖人の仏法の真髓**が、学会の教学研さんによって、民衆へ、世界へと開放されたのであった。—と。(「創立の日」記念SGI代表勤行会 1991.11.18 スピーチ)

(**私見**)上記より、**戸田先生と池田先生**は日興門流の正義、清流の元、**相伝書**を最大限に尊重され、更に、日寛上人の教学も、時代にそぐわない論点はしっかりと認められ、その上で、日蓮仏法の正義、真髓を現代社会に、丁寧に指導されました。

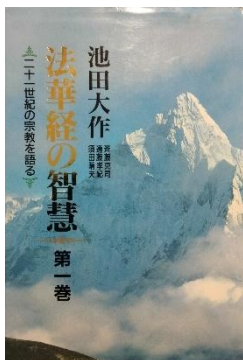
結論、その集大成こそが2000年発刊の池田先生の「**法華經の智慧**」全6巻です。この**玉稿**では、相伝書と日寛上人の「**六卷抄**」を縦横無尽に引用、応用されています。「**法華經の智慧**」こそが、現代から未来に向けての生きた学会教学なのです。それを完全に否定しているのが「**教学要綱**」と、男子部教室なのです。

② 須田晴夫氏の著作の正義とその先見性について

前述の通り、戸田・池田両先生は日興門流の正義と、相伝書の重要性を終始一貫、ご教示下さいました。そして、そのご教示は「法華經の智慧」に昇華されたと拝します。「法華經の智慧」で、池田先生と鼎談された三人の青年の一人が須田晴夫氏です。

私は、一昨年11月発刊の「教学要綱」を何十回も読みました。そして、結果、絶望しました。こんな、釈迦本仏論を主張する教学(「釈尊が永遠の仏」他の記述)があつてはならない。この本については、学会員さん全員が納得いくまで内容を討議、検証すべきだと思います。私は、浅学ながら、疑問の拙文を1月と2月に記しました。

そんな経過の中、私は、須田氏の著作を初めて知り、読み始め、ほとんどの著作を読みました。そして、結論として、須田氏の著作には、池田先生と鼎談された「法華經の智慧」で論証された法華經の真義である日蓮本仏論が、一点の曇りもなく承継、論証されていました。それは、まさしく、池田先生との直接の対話を通して得られた確信に基づいた、池田先生の代弁であると感じます。



「法華經の智慧」を、何度も拝読しました。その結論として、この書こそが宗門の濁流、即ち、日顕宗への破邪顕正、勝利を成し遂げた凱歌の書であり、それはまた、再び、清流となった日蓮仏法の正義、本流である日興門流を、池田先生が証明され、世界広布のために遺された玉稿であり、私見「人類の教科書」と拝しております。

実際、「法華經の智慧」は全世界の学会員さんの信心の依処となっています。それは、池田先生の真心が込められているからです。

池田先生が「法華經の智慧」の論述の中において、相伝書の「本因妙抄」「百六箇抄」「御義口伝」と日寛上人の六卷抄を縦横無尽に引用され、日興門流の正義を記し置かれた歴史的事実がどれほど偉大であるか。私達は、今こそ深く知ることが大事であると思います。

私は、この池田先生の偉業に対して、全く違背、忘恩なのが「教学要綱」であると思っています。「教学要綱」は、本拙文ですでに論証したように、結論「釈迦本仏論」です。そして、1、2拙文と今回の拙文でご紹介する、先生の「法華經 方便品・寿量品講義」1-3 と「法華經の智慧」についての、「教学要綱」の下記の記述は、両方の大著を軽視しているとは思えないのです。それは以下の記述です。

「**教学要綱**」55、56頁には一小題(三)池田先生と「法華經」と題して次のようにあります。

一池田先生は、1995年5月から、機関紙「聖教新聞」紙上で「**法華經 方便品・寿量品講義**」の連載を行い、さらに同年、機関誌「大白蓮華」二月号から、「**法華經の智慧**」―二十一世紀の宗教を語る」と題する長期連載を行った。

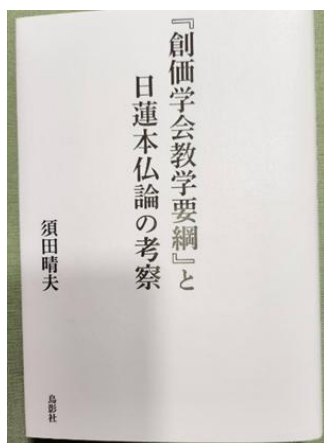
この連載の中で、池田先生は「仏とは生命なり」「我、**地涌の菩薩**なり」との戸田先生の獄中の悟達について、「戸田先生は、まさに自身の根源を悟られるとともに、“あらゆる人が、じつは根本において**地涌の菩薩**である”という人類共通の基盤を悟られたのです。その“生命の故郷”を知ったのが、学会員です」と述べている。

創価学会員は、**地涌の菩薩**としての自覚と誇りをもち、自らが抱えている悩みや苦難などの宿命を、あえて自らが願って担った使命として捉えている。そして、自他共の幸福を実現するために、悩める友のもとへ、苦しむ人々の中へ飛び込み、勇んで**地涌の菩薩**の実践に挑んでいる。

「我、**地涌の菩薩**なり」との戸田先生の悟達を一人一人が共有して、妙法の弘通に邁進している。また、池田先生が「あらゆる人が、じつは根本においては**地涌の菩薩**である」と指摘するように、末法の衆生は誰もが妙法によって仏界を開く可能性をもっているであり、万人が本来、**地涌の菩薩**の使命を帯びていると捉えられる。一と。

私は、この記述を読んで、怒りが湧きました。なぜ、こんな表現しかできないのだと！池田先生は、日蓮仏法の最奥義を、「御義口伝講義」「百六箇抄講義」「開目抄講義」「観心本尊抄講義」「生死一大事血脈抄講義」「諸法実相抄講義」等で、私たちに垂教して下さいました。そして、私たちが毎日実践する勤行・唱題の意義について、「**法華經 方便品・寿量品講義**」を、更には、日常生活から人生、そして身近な社会から地球規模の課題に至る問題解決への根本的ご教示、羅針盤として「**法華經の智慧**」を残して下さいました。

この池田先生の二つの大著に対して、「**教学要綱**」は「**地涌の菩薩**」の自覚、使命、誇り―との全くの文上解釈だけで表現し、事足りるかのような記述に、私は「**教学要綱**」の池田先生への、あまりにも酷い不遜を感じてならないのです。そして、その数えきれない誤りをいち早く見極め、破邪顕正の書『**創価学会教学要綱**』と**日蓮本仏論の考察**』を発刊されたのが須田晴夫氏なのです。私は、この書を読み、「**教学要綱**」の誤りにつき完璧に破折されていると確信しました。



本書には「『創価学会教学要綱』の考察—仏教史の視点から」(2024 年発表)と「日蓮本仏論の考察—宮田論文への疑問」(2016 年発表、2024 年加筆)の二編の論文、更に付論として「『教学要綱』に関する会長宛て書簡」と「男子部教室『論考』への応答」を収録した。『創価学会教学要綱』が発刊されたのは 2023 年だが、その成立の背景には後者で取り上げた日蓮本仏論やアカデミズムを巡る問題がある。それ故、二編の論文が執筆された時点に八年の間隔があるが、内容的には強い関連があるので、二つを合わせて通読すれば問題をより深く理解していただけるものと思う。(本書「はしがき」より)



私は、須田氏の多くの著作を読み、たくさんの知見、感動を頂きました。その中でも特に感銘を受け、今も、研鑽していますのが、著作「**日興門流と創価学会**」です。さらに、その中でも、特に、一日蓮と相伝法門—に解説された「**本因妙抄**」「**百六箇所**」「**御本尊七箇相承**」の解説です。

私見、須田氏が、この三つの相伝について解説を後世のために残された意義は、どれほど大きいのか、深く感動、敬意を表します。これらの解説は須田氏以外にはないと推察します。

「本因妙抄」と「百六箇抄」については、戸田・池田両先生が、多くのご指導を残して下さっております。特に、**池田先生の「百六箇抄」講義**は、法華経と日蓮仏法の真義、正義を詳細に教示された、創価学会教学の基盤であります。そして、須田氏が、上記二つの相伝に加えて、「**御本尊七箇相承**」についても解説をされたことは、他の誰もされない偉業であると思います。

須田氏は、著書において、以下のように記しています。

—「**御本尊七箇相承**」は、曼荼羅本尊を顕わす在り方について日蓮から日興に与えられた相伝を記した書とされる。日興自身がその相伝を筆記したか、あるいは高弟に語った内容を門下が記録したものと推定される。—と。(「**日興門流と創価学会**」160頁)

「**御本尊七箇相承**」については偽書扱いされることがありますが、池田先生は小説「新・人間革命」第19巻「宝塔」御本尊七箇相承 —1 宝塔(1)において、以下の様に指導されています。

—「大聖人がこの世に弘めようとされたものは、端的に申し上げれば『**本尊**』であります。『**本尊**』とは、『根本として尊敬すべきもの』です。(中略)『**御本尊七箇相承**』に『**汝等が身を以って本尊と為す可し**』(『富士宗学要集』第一巻所収)とある通り、あえて誤解を恐れずに申し上げれば、総じては、『人間の生命をもって本尊とせよ』ということであります」

「御本尊七箇相承」とは、日蓮大聖人から日興上人に相承された、御本尊に関する七箇の口伝である。伸一は、力強い声で語っていった。「つまり、大聖人の仏法は『一切の根源は“生命” それ自体である。根本として大切に尊敬を払っていくべきものは、まさに“人間生命” そのものである』という哲理であり、思想なのであります」明快な話であった。明快さは、そのまま説得力となる。一と。

この池田先生のご指導の通りに、須田氏が「**御本尊七箇相承**」の解説を、後世のために記し残されたことは、人類史に残る偉業であると思います。そして、このことも含め、須田氏が三代会長の思いを拝察されて、三つの相伝書の解説を記し置かれたこと、その先見性に敬意を表しています。

その他、須田晴夫氏の著作につきましては須田氏のホームページをご参考下さい。
<https://www4.hp-ez.com/hp/haruosuda/>

最後に、私は、戸田・池田両先生が最重要視され、ご指導の中で何千回も引用し、教示された相伝書について、「**教学要綱**」と**男子部教室が無視することは、忘恩であり、師敵対そのものである**と思っています。

余談となりますが、去年の法戦中、墨田区の幹部数人が須田氏宅に来て、須田氏に対して、「選挙に負ける、影響がある！」みたいな脅しをしました。それに対し、須田氏は、一番大事な法華経の兵法、日蓮仏法の危機からそれらの暴言を一蹴されたと、伝え聞きました。

私見、その須田氏の深い憂慮を、日本中、ほとんどの学会員さんは分らないのです。この20年近い間、教学研鑽の劣化、邪義化が、学会員の教学への見識、感性を恐ろしく軽薄化、麻痺化してしまいました。何と、宗教批判の原理である五重の相対が捨てられたのですから、教学の基礎が崩されてしまっています。学会員が衆愚に成り果ててしまうことに、凄い危機感を覚えます。皆様、賢明であれと、祈らずにおれません。

③ 戸田先生の講義とご葬儀に、私は母と共に参加、参列出来たことへの想い

私は昭和 30 年 5 月に生まれ、10 月に両親が入信しました。32、33年、母は、わが家近くの豊島公会堂で戸田先生の法華経講義に私を連れて参加しました。戸田先生の講義は、まさに庶民を生命の奥底から蘇生されました。33 年 4 月 2 日、戸田先生はご逝去。8日の常在寺での告別式に12万人が参列、その中に、母と私もおりました。

学会史に残る、4月2日、そして、その前後のご様子、その時の池田先生のご心境を、私たちは厳肅に拝したく存じます。それゆえ、引用、ご紹介させて頂きました。

「**若き日の日記**」には戸田先生のご逝去、直前のご様子が、以下、記されています。

添え書きには一昭和三十三年三月十六日、戸田会長の要請で男女青年部六千人が総本山に結集し、広布の記念式典を挙行了た。そして、戸田会長は三月三十一日まで、病をおして総本山にとどまり、最後まで厳然と指揮を取られました。一とございます。

「**若き日の日記**」

四月一日(火)晴

午前一時四十分、先生を東京にお連れ申す準備をする。日淳猯下のご心境、先生のお心、いかばかりか。今世のお別れとなられるか。恐れ多くも、猯下には、勤行を早めに終えられ、お見送りに来られたとのこと。今日の大宗門の繁栄に、心を砕いてこられた日淳上人、猯下をお護り申し上げて身命を捧げて戦ってこられた地涌の菩薩の総帥、戸田城聖先生、三世につながるお二人の深き縁を、深く尊く、考えずにいられない。嗚呼、玄妙なり、合掌たり。

理境坊の二階より、午前二時ちょうど、出発。フツンのまま。「先生、お供致します」と申し上げると、「そう、メガネ、メガネ」とおっしゃった。メガネを、お渡しするいとまもあらず、心残りなり。階下より、担架にて、車におはこびする。二時二十分。奥様と医師同車。続いて、理事室、私共の車。最後に青年部の車であった。

月おぼろにして、静寂なる田舎道を、沼津駅へ。三度、四度、車止まり、先生の容体を伺い、また注射をなす。三時四十五分、沼津駅に到着。四時十五分発急行「出雲」に乗る。「先生、これで安心です」と申し上げたところ、「そうか」との微笑は、永久にわすれないだろう。

早朝、六時四十五分、東京駅着。一睡もせず、沈痛な気持ちで、担架でお降ろし申し上げ、ただちに、私どもは、日大病院にて、お待ち申し上げます。お疲れと、重体なるお顔に、胸がせまる。

ああ、世界の大偉人の最後のご帰京となられるのか、心で唱題をあげるのみ。全快を祈るのみ。ただちに、K 医師、H 医師の手当てあり。九時過ぎ、一切の手続きを終わらせて、ご家族にお願い、会社に戻る。万感、ただ、平癒を祈るのみ。弟子、皆同じ。

一日中暖かな日であった。されど、弟子一同の心、暗雲の如き気持ちは、いかようにもなし難い。われわれは、更に、自己の信心を磨くべきである。自己の建設をなすべきである。－無数の偈、去来して一日を送る。

四月二日(水)曇り（戸田城聖先生のご逝去の日）

あさ、緊急に、部隊長会議を招集する。心急ぐ感あり。先生のご容体非常に悪し。一週間、部隊長全員にて、本部にて勤行することを決意する。午後、本部にて、秘書部長より、「先生の経過良好になる」との報を聞き、われは狂喜。五時より、理事室、青年部首脳と、連合会議をなす。

六時四十五分、管理部の H 老より、真剣な表情で、私に「病院から子息、喬久君より電話」とのこと。風の如く、管理室の電話を受く。喬久君より、落ち着いた語調で「ただ今、父が亡くなりました」との悲報を受く。この一瞬。われ、筆舌に尽くし難し。愕然たる憶念は表記でき得ず。永劫に、わが内証の座におく以外なし。ただちに、重大会議になる。

先生のご意志は、清らかな水の流れの如く、広布達成まで流れゆくことを祈る。強くなれ、と自分に叱咤。早速、日大病院の病室に、理事室、青年部首脳のみ、馳せ参ず。静かな永眠の姿に、はたまた、微笑したお顔に、感無量。滂沱。嗚呼、四月二日。四月二日は、学会にとって、私の生涯にとって、弟子一同にとって、永遠の歴史の日になった。

ただちに、日淳猊下へ電報、細井尊師へ連絡、ご親戚へ連絡。先生のご遺体にお供して、目黒のお宅に戻る。小雨、少々降る。細井尊師おみえになる。読経・唱題。理事室、青年部首脳にて、死水を。

妙法の大英雄、広布の偉大なる先生の人生は、これで幕となる。しかし、先生の残せる、分身の生命は、第二部の、王仏冥合実現の決戦の幕を、いよいよ開くのだ。われは立つ。

四月八日(火)曇り (戸田先生の告別式の日)

先生のご遺言により、ご遺体を、一週間、お護り申す。今日が、最後の別れ。悲しい、くやしい。「在在諸仏土常与師俱生」のご金言をかみしめる。朝、先輩が迎えに来る。私は断る。師匠との最後のお別れの日である。私は私なりに、一人して先生宅にお邪魔したい。最後の先生とのお別れに、誰人よりも淋しく、悲しい弟子は、私である。厳しい父であり、やさしい父であり、今日の私あるは、全部、恩師の力である。瞻仰。三十の遺弟、青年、八時三十分、師の宅へ。

九時より、細井尊師の導師により、読経、出棺。十時、目黒のお宅を出発。棺の前を、I 理事と共に抱く。必ずや、先生は、喜んでくださっていることを信ずる。「先生、お休みなさい。お疲れだったことでしょう」私も、御遺命を達成し、先生のもとへに、早く馳せ参じたい。黙念。

十一時、池袋の常在寺着。当日の焼香者、十二万人。誠心の人であり、先生を、心からお慕い申し上げる方々である。今後、この方々を、更にさらに、無量に指導し、幸福にしてあげねばと決意。父にかわって。

十一時四十分。日淳猊下御出座。読経、欺徳文、遺族喬久君挨拶。最後に葬儀委員長挨拶。僧侶約六十名、大幹部、部隊長、ご親戚、友人等、計約三百人での焼香、順次終了。

三時三十分、青年部幹部を先頭に、僧侶二台、遺族の車、そして先生、ご親戚、大幹部、理事室と、落合火葬場に向かう。常在寺、最後の細井尊師の読経の際、一陣の強き風吹けり。火葬場にても、また天空に真っ赤な色彩を強く強く感ず。二日より今日まで、曇天続く。

(所感) 戸田先生のご逝去された日の、前後のご様子も含め、「若き日の日記」を拝読、池田先生のご心境に触れ、万感の思いが胸に迫ります。私は、4月2日当時、2才と10か月でしたが、母に連れられ、近くにあった豊島公会堂での戸田先生の法華経講義に参加したこと、そして、8日、常在寺での告別式に参加したこと、記憶では定かでないですが、母から聞いておりました。

戸田先生のお声を、直接、耳朶に拝した自身の福運と使命感から、この度の拙文を記させて頂きました。戸田・池田両先生がご逝去された今、両先生のご指導を、一言なりとも、粗末にしては、絶対ならないとの思いでいっぱいでございます。

④「法華經の文底」の真義を知ることの重要性について

今回、私は、戸田先生の講義を拝し、あらためて法華經の研鑽を致しました。そして、その文底である日蓮仏法の奥義に触れ、自身の教学への姿勢に襟を正しました。と同時に思うことは、今の若い方々に、何としても日蓮仏法の正義、真義を知って頂きたいとの思いです。そんな折、アマゾンの『[創価学会教学要綱の意味するもの](#)』の著者で、親交のある中村誠氏から、以下の論考を拝しました。正論です。ご紹介します。

今の若い人たちは「文底」の重要性を明らかに理解していないと思います。ただ単に、寿量品に隠された南無妙法蓮華經が文底というような理解しかしていないと思います。そのような教え方を教学部がしてますから、これは仕方がないです。そして、それは、文上の法華經と文底の法華經、この違いこそが、五老僧と日興上人の決定的な教義の違いであることと同じと言えます。

富士一跡門徒存知の事には、次のようにあります。「五人一同に云く、日蓮聖人の法門は天台宗なり、仍つて公所に捧ぐる状に云く天台沙門と云云(略)日興が云く、彼の天台・伝教所弘の法華は迹門なり今日蓮聖人の弘宣し給う法華は本門なり、此の旨具に状に載せ畢んぬ、此の相違に依つて五人と日興と堅く以て義絶し畢んぬ」

この真義に基づいて、以下、論じます。－

兄弟抄には「摩訶止観の第五の巻の一念三千は今一重立ち入たる法門ぞかし、此の法門を申すには必ず魔出来すべし魔競はずは正法と知るべからず」とあります。この一念三千の法門は実は天台の法華經ではありません。また、開目抄には「一念三千の法門は但法華經の本門・寿量品の文の底にしづめたり」とありますから、文上の天台の法華經ではなく、文底の法華經の一念三千でなくてはならない、という意味です。

さらに、草木成仏口決には「(文底の)一念三千の法門をふりすぎたてたるは大曼荼羅(御本尊)」とあり、また、観心本尊抄には「一念三千を識らざる者には仏・大慈悲を起し五字の内に此の珠を裹み末代幼稚の頸に懸けさしめ給う」とありますから、この法門が如何に重要であるかわかります。これらは御本尊という根本教義に関するものです。

そして、法華経は御本尊の設計図で、十界や三世間(戸田全集 5 巻,p.420) が秘められているわけですが、この十界は当然、総じては我々、別しては大聖人の十界、即ち文底の一念三千でなければならず、これが文上の釈迦の一念三千だと意味が全く違ってきます。法華経の解釈がこのように違ってくると、御書の読み方も当然全然違ってきてしまい、結果として、「教学要綱」のような文上の法華経の解釈をするのであれば、全く違う宗教になってしまい、日顕宗となんら変わらぬ邪教になってしまうと言えらると思います。

そして、ここに相伝書の重要さがあると言えます。戸田先生がおっしゃられるように、文底から法華経を説いたものが相伝書だからです。これらを用いれば「我等が内証の寿量品とは脱益寿量の文底の本因妙の事なり、其の教主は某なり」百六箇抄と、末法の御本仏がどなたであるか初心者でも簡単に理解できる答えが出ます。御書の難しさは、戸田城聖全集 1 巻、御書の拝読について p134-135 に説かれています。一方、真筆御書からでも問題なく日蓮本仏論を証明することはできます。大聖人ご自身が自らを主師親の三徳を具える存在とされ、「大聖人」「法主聖人」と言われているからです。

「御書根本」と言っても、御書には表面的にとれば互いに矛盾する内容も多くあります。膨大な御書を自分勝手な判断のもとにどれだけ読み込んでも結局は迷路にはまり、身延派のようなものになってしまいます。だからこそ大聖人に常随給仕し、大聖人の御本意を正しく継承された日興上人を基準にしなければならないのです。

戸田・池田先生が日寛上人を重要視する姿勢も当然と言えば当然でしょう。御書を正しく解釈できる師匠の存在というのが非常に大事なのです。古くは日寛上人、現代では牧口・戸田・池田先生ということが言えます。御書根本というのは聞こえは良いが、真筆御書のみこだわると、初心者は間違いなく迷路にはまり、釈迦の弟子日蓮という身延流の邪義にはまるでしょう。これこそが執行部の狙いでもあります。相伝書が学術的に信用ならないものであるならば、真筆御書を用いてその内容を証明すれば良いだけであり、執行部の態度は完全に間違ってますね。

ああした態度というのは、ひらがな御書は低級だからという理由で焼き捨てた五老僧に通じるものです。又、庶民を見下して権力を重んじる腐った精神が背後にあるのではとさえ感じられます。このような精神こそが僭聖増上慢の特徴だと思います。御書根本の美名の名の下に、安易な読み方をさせて、釈迦の弟子日蓮という身延流の読み方に学会員を導こうとする「教学要綱」の悪巧みが背後にあり、身延を破折し尽くした日寛上人を、なぜ嫌うのかという理由がここにあると思います。

そして、戸田・池田先生が日寛上人を重要視する姿勢も当然と言えば当然でしょう。御書根本の名の下に御書を読むと、必ず迷路に陥り、身延とほぼ同じ答えになってしまうでしょう。だから師匠が大事ということだと言えます。古くは日寛上人、現代では牧口・戸田・池田先生ということが言えます。御書を正しく解釈できる師匠の存在というのは非常に大事です。我々学会員が求めているのは、永遠の師匠であられる牧口・戸田・池田先生が一生を通じて信仰されたものと全く同じ内容の信仰であり、それを装った「別の何か」は誰も求めていないはずで。

御書を拝読して正しく解釈することの難しさに関して戸田先生は、更に、次のように講義されている。「御書をあらためて見なおしてみよ！お若い時の御書には、天台の学説を強く用いられているものもある。これは、権実相對をもって、お説き遊ばされているのである。ある御書には、権実、本迹だけのものもあり、また、ある御書には、大小、権実、種脱とあるものもあり、また第一、第二、第三の教相をもって説かれ、また種熟脱をもって説かれ、また下種仏法の根底たる三大秘法を説かれているものもある。

三大秘法においても、三種ともにこれを説かれているものも、題目のみを説かれているもの、題目と本尊を説かれたもの等々がある。また五重の相對を能化の釈尊を用いて、これまた六種に説かれている場合もある。すなわち蔵通別の釈尊、文上本迹二門の釈尊、文底下種の釈尊と分けて説かれていることに、気をつけねばならぬ。

この御書は、いかなることを大聖人は説かれているかということを、たえず、以上に述べた分類に注意して拝読しなければ、無意味なものとなる。」(戸田城聖全集一卷、御書の拝読について、p. 134-135)ただし、だからと言って御書はごく一部の人間(例えば法主等)にしか正しく解釈できないという考えも同様に誤りである。戸田先生は次のように講義されている。「御遺文を研究して大聖人の御観心がわかったというのも誤りであり、また、御遺文は、われわれ凡夫の生活とはかけはなれた、むつかしい別のものだというのも、同様に誤りなのである」(戸田城聖全集三巻、凡夫と御本尊、p. 67) — と。

私は、中村氏の上記論考は、その通りであると思います。**結論、私達の教学研鑽は、三代会長の指導を違えてはいけません。それを、完全に逸脱、否、否定しているのが釈迦本仏論の「教学要綱」であると、私は断言します。**

⑤ 「教学要綱」を絶版にすべき理由

「教学要綱」が発刊され、約1年半近くとなります。今、ネット上には、この書を完膚なきまでに破邪顕正された須田晴夫氏の論考を支持する圧倒的な論述で溢れています。また、須田氏の著作を批判した男子部教室のあまりにも拙い反論も、支持する論考は見ることはありません。そして、こんな状況に、多くの学会員さんはあきれています。一体、創価学会はどうなっているんだと。

対話、議論もなく、須田氏は破和合僧だから会員に徹底しなさいとの、幹部からの、上意下達で、須田氏の地元墨田区だけでなく、東京、大阪、埼玉などであると聞きました。これが、人間を最大に尊ぶ創価学会のあるべき姿なののでしょうか？はっきり言って、異常です。これでは、学会の社会的信用は内外共に失墜していくばかりです。執筆者を明示しないままの「教学要綱」と男子部教室、これは社会正義に反し、論外です。

私は、これまで3回、地元幹部に「教学要綱」への疑問を記した拙文を送りましたが、最初だけ呼ばれ、その幹部からは私の教学の質問には一切返答はなく、最後に、学会に異を唱えることは破和合僧です、と言われました。こんな言葉が帰ってくるとは思っていませんでした。

私は、来月古希を迎え、10月に入信70年となります。生まれてからずっと創価学会のお陰で希望を持ち続け、生き抜いて来ました。3歳の時、父は亡くなりましたが、母は戸田先生のご指導を胸に、3人の子を育てました。学会なくて私の人生、我が家はなかったです。母はいつも戸田先生のご指導を私に語ってくれました。その母も池田先生のご逝去の翌月、鬼籍入りしました。学会と共に生き抜いた見事な最期でした。

最後に、「教学要綱」を絶版にする必要性、と題をつけましたが、もう、細かな論述はしません。既に、戸田・池田両先生のご指導をたくさんご紹介しました。それを精読いただければ、結論は一目瞭然です。

池田先生は小説「人間革命」第10巻一念の章、大阪の戦いで一なにの兵法よりも法華経の兵法をもちひ給うべし、「諸余怨敵・皆悉摧滅」を教示されました。(35, 36頁)常勝関西の原点の一文でございます。現在、その法華経の兵法を「教学要綱」が壊していると、私は思っています。ゆえに、「諸余怨敵・皆悉摧滅」にならないのです。

よって、「教学要綱」は絶版にしなければなりません。そして、日蓮仏法の正義、清流である日興上人、日寛上人の教学の王道を歩むべきです。それが、三代会長が歩まれた創価学会の本道であるからです。 62/68

(追記)

本稿を終え、さらに、戸田・池田両先生の日蓮仏法への深遠なるご垂教を拝しました。また、須田晴夫氏の著作からもご教示頂き、本稿を補完する、重要な3つの視点を追記しました。

1. 本稿の33頁で記した、①「教学要綱」が28頁で、如来寿量品における釈尊を4回も「永遠の仏」と記した誤り、の追記、補講として—

「生命と仏法を語る」(池田大作全集第11)第七章 生命の法理「蓮華」等覚一において、池田先生は「釈尊の仏法は、すでに使命が終わった」と下記述べられているのです。

— 光彩を放ちつつ昇る太陽の「法」 —

池田 今度は、釈尊の仏法は、「大集經」という經文でいわれているのですが、正法年間、像法年間の約二千年でまったく効力を失い、末法の衆生とはまったく縁なき「法」となる。末法の時代に入ってから、その末法の仏が説く「法」によって結縁され、成仏していく以外ないということになるのです。そして、ご存じのとおり、末法に入って日蓮大聖人の御出現があり、末法万年を志向されて、多くの宗派との法論のうえからも証明された「大法」を樹立されたわけです。その法こそが、久遠元初より無始無終であり、永遠にわたる真理である「南無妙法蓮華經」という、仏法の極説中の極説の「法」となり、即一幅の御本尊となるわけです。

屋嘉比 その御本尊に、仏法のすべてが凝結されているわけですね。

池田 そのとおりです。ですから、過去も、現在も、未来も、また一切の因果も超克し、かつ一切を強力に発現しゆく本源の大法則こそ、「南無妙法蓮華經」といえるのではないのでしょうか。この御本尊に帰命しゆくときのみ、私どもの生命も、久遠元初の若々しい生命として輝き、広がりゆく。ゆえに、私どもの過去遠遠劫からの罪業を、一生のうちに転換せしめゆく方程式がここにあるわけです。

屋嘉比 なるほど。

池田 こうして釈尊の仏法は、すでに使命が終わった。そのようないくつかの理由から、「本果妙」の仏法となるわけです。それに対し、第六章でも少々論じさせていただきましたが、日蓮大聖人の仏法を「本因妙」とたてます。 63/68

その本因妙の仏法である、御本尊に帰命しゆくときに、初めて天上界、菩薩界をも突き抜け、ついには仏界へと、自分自身の内なる根源力を、無限に発現しゆくことができるわけです。

これは、現世だけではなく、**三世永遠**に連なる生命を躍動させ、強靱にして崩れざる仏の「我」を、強めていくことができるわけです。

屋嘉比 素晴らしいことです。

池田 ですから、大聖人の仏法における「本因本果」とは、この根本的善の原因であり、根本的善の結果ということができます。言うなれば、「本因妙」の仏法は、太陽が無限の光彩を放ちながら昇りゆく姿といえる かもしれない。それに対し、インド応誕の**釈尊の仏法は、夕日の沈みゆくがごときもの**である。司会—— つまり……。

池田 「本因妙」の仏法は、生きとし生けるものすべてをして、ありとあらゆる煩悩、そしてまた生死の闇を赫々と照らしながら転換させ、さらに超克せしめゆく、「現当二世」の「大法」であるわけです。これに対し**釈尊の仏法は、過去遠遠劫より調機調養されてきた有縁の衆生を救済する役割が、すでに終わった仏法**となるのです。一と。

(私見)すなわち、「**教学要綱**」は、文上解釈としての「**永遠の仏**」などと記しては絶対にいけないのです。**池田先生のご指導を完全に無視している**のです！

2.「**新版**」が削除した「**久遠元初自受用身如来**」の根本的重要性とその意義について池田先生のご指導と須田晴夫氏の「**円環**」の考えをご紹介します。

本稿9頁で以下の記述を致しました。— 20.「講義」86 頁には一小題「五百塵点劫は始成の成仏觀を打破」のところで一大聖人は「觀心本尊抄」で、妙法を受持するわれらの「己心の釈尊」は、「無始の古仏」であると仰せです(御書二四七頁)。**この文底の趣旨を明らかにしたのが「久遠元初」です。「久遠元初」とは、生命の本源、大宇宙の本源という意味です。その本源の生命こそ久遠元初自受用身如来の生命であり、即南無妙法蓮華經です。「久遠とは南無妙法蓮華經なり」(御書 759 頁)と仰せです。—と。それが「**新版**」23 1 頁では**一上述の赤字下線が完全削除**。**

—池田先生はルネ・ユイグ氏の対談「**闇は暁を求めて**」で、— 合理主義の狂気性**円環的**—と題して、以下述べられています。 64/68

—あなた(ルネ・ユイグ氏)は「西洋人は結果をうることに貪欲で、その結果をうるための原因を探究するが、それによって生ずる結果の複雑さを考えようとしない」と指摘されていますが、その傾向性は個々の事物の**因果を閉鎖系として完結させてしまうところに原因**があるのではないのでしょうか。

仏教は全体的な相関性のうえから空間的には一種の**円環的な因果**の連続を見て、時間的には無限につづくサイクルとして因果をとらえています。前者は基本的には縁起と呼ばれる考え方であり、後者は、輪廻と呼ばれる考え方です。前者は仏教の初期の経典において「此れあるときに彼あり、此れ生ずるときに彼生ず、此れなきときに彼なく、此れ滅することにより彼滅す」と、簡潔にその思想が説かれています、のちに依正不二論、一念三千論等の原理として完成されています。

後者の考え方は、のちに生住異滅の四相、成住壊空の四劫などの原理として展開されます。簡単にいえば、すべてのものは発生と成長、安定、崩壊、消滅のサイクルを永遠に繰り返すというのですが、私はこうした**全体的・総合的な因果の視点が、今日ほど要請されているときはないと痛感しています。**—と。

私は、上記、池田先生の**円環的**因果の捉え方を拝読して、このスケール感、歴史観、巨視的な見方こそが、**日蓮仏法の奥義たる久遠元初の自受用身への理解を深める視点**だと感じました。即ち、狭義の法華経文上の釈迦を主役とした生命感、宇宙観を突き破った本質論、即ち、**久遠元初自受用身如来の日蓮大聖人の南無妙法蓮華経**を捉え表現された垂教と拝しております。そして、それを更に補足、説明された論述が、須田晴夫氏の下記でした。—

「須田氏の『創価学会教学要綱』と日蓮本仏論の考察」104, 105頁には—

『**教学要綱**』が日蓮を名目だけは「末法の本仏」としながら同時に最後まで「**釈迦の使い＝上行**」と規定し、釈迦を日蓮の上位者に置いている所以は、やはり仏教は釈迦から始まるという歴史的事実に囚われたからであろう。

歴史的に見れば仏教は釈迦一人から始まるのであり、釈迦がいなければ仏教そのものが成立しない。その歴史的事実に拠る限り、仏教の本源は釈迦以外にはなく、途中から現れた日蓮などが釈迦を超越する根源となりうるわけがないという観念が生ずる。

しかし、そのような時間観念は眼前の歴史に囚われたものでしかない。仏教によれば宇宙も含めた万物は生成と消滅すなわち成住 壊空を繰り返すものであり、時間は円環的なものであるから、実は前も後ろもない。前後の区別などはなく、万物が無始無終の存在なのである。—と。



上記、須田晴夫氏の「円環」論は、一つのベクトルである時間論と歴史空間を超える生命論、即ち、大宇宙の根源である無始無終の妙法への論述、日蓮仏法のみが教示できる久遠元初自受用身を感じる論考であり、無限の過去から末法万年尽未来際、即ち、「永遠の妙法」への必須の視点であると拝します。



そしてそれは、釈迦本仏論を見下ろす論考であり、まさに、法華經のスケールの大きさを示した論証がここにあると拝しております。

日蓮仏法の真義は「久遠元初の自受用身如来」に尽きるのであり、それを削除した「教学要綱」は、日蓮仏法を語る資格が全くないのです

SGIの最前線、イタリア、タイ、ブラジル、韓国、アフリカの国々、全世界の新入会の友は、結論、人法一箇の御本尊様に唱題する中で、「久遠元初の自受用身如来である日蓮大聖人の仏界の生命、即ち、南無妙法蓮華經」の歓喜を実感しているのです。

そして、皆さんは、唱題により「久遠元初の自受用身」を我が生命の実感として受け取り、その後、教学の研鑽を通し、信行学を完成させていかれるのです。それを、最初から釈迦仏法の「教学要綱」で押し通そうとすることは、皆さんを、現実との違和感に遭遇、悩ませるだけだと断じます。

生命の歓喜の根源である「久遠元初の自受用身如来」を削除、否定した「教学要綱」は、池田先生が全人類のために記し残された『法華經の智慧』を完全否定した、全くの不知恩、師敵対の邪義なのです！日本中、世界中からの疑問、質問に対して、もう、まともな反論ができないではないですか！正義、友好、言論の自由の集いであるはずの創価学会の根本理念に反しています。 66/68

3. 今、一番大事なこと、それは「**教学要綱**」の誤りを糺す対話、討議です。

私は、「**教学要綱**」の誤りを知った方々に、御書の「**日蓮を用いぬるとも、あしくやまわば国亡ぶべし**」と、日興遺誠置文の第二十一条「**謗法と同座す可からず与同罪を恐る可き事**」を拝して下さいと申し上げます。そして、皆様にも「**教学要綱**」の誤りを糺す声を上げて頂きたいと思っています。私は、池田門下生の一人として、この拙文には絶対の確信があり、異議のある方とは、是非「法論」をさせて頂きたいと思っています。そして、今、一番大事なこと、それは「**教学要綱**」の誤りを糺す学会員さんの対話、討議であると思います。その必要性、意義について、**戸田先生**の下記ご指導を拝しています。

「**人間革命**」第9巻 発端の章 法論のところに、戸田先生が小樽問答を振り返られての心情が以下の様に記されています。

— **戸田は、現代における公場対決とはいかなる形式を指すのか思索を重ねていた。厳寒は深く、暁に近かったが、彼は、なおも目覚めていた。**” 主権在民” にして、かつてのような国主の存在しない現代に、おいては**民衆の審判による以外にない**。してみれば、日夜、展開されている**学会活動も、夜ごとの座談会も、大切な公場対決の縮図**といえるが、民衆の審判は、いまだ極小の部分に限られている。

このような対決が大きな効果をもつためには、その法論に一宗の命運を賭した場合が、ひとたびは必要であるかもしれない。これこそ、**現代の公場対決の一環**ということができるだろう” 戸田が、ここまで考えいたった時、小樽に惹起した事件の意義が、にわかに鮮明な色彩を帯びてきた。一宗の命運をかける可能性が、十分にあったからである。— と。

上記、戸田先生の「**民衆の審判による以外にない。してみれば、日夜、展開されている学会活動も、夜ごとの座談会も、大切な公場対決の縮図といえる**」のご指導の通り、日本中、世界中で、「**教学要綱**」についての「**民衆の審判**」が必要であると考えます。

民衆による審判により、学会教学の本当の正義が判定され、世界広布のための真実の「**新 教学要綱**」が創出されていくと確信します。世界中の学会員の皆様、そのために、この度の「**教学要綱**」の正邪につき、真摯な法論、審判をお願い申し上げます。

以上で、私の拙文を終わります。最後まで、お読み頂き感謝申し上げます。この拙文を、親しき同志にご紹介下さい。又、皆様のご高見を拝したく思います。忌憚なき、ご意見、ご指導を zusaiosamujyumoku@yahoo.co.jp まで下さいませ。

敬具 図斉修

—〈池田先生 永遠の指針〉 4・2「第2代会長・戸田城聖先生命日」—

「随筆 人間世紀の光」〈桜花の「4・2」に恩師を想う④〉(『池田大作全集』第138巻所収)



生き抜いた 咲き抜いた

桜の王者は 勝利の大王だ

思えば、一九五八年(昭和三十三年)の四月二日、**戸田先生が逝去なされたその日**—都内の桜は、五分咲きとなっていた。先生は桜がお好きで、前年の秋、ご自身の死期を「桜の咲く頃」と呟いておられた。

桜の花は、**七十五万世帯の大法弘通の大願を成就**され、万代の広宣流布の礎を築かれた恩師の凱歌の笑みとも、私には見えた。なぜ、**師が「桜の咲く頃」と望まれたのか**。それは後世の弟子たちへの慈しみの心境であられたと、私には思えてならなかった。すなわち、決して感傷に囚われず、桜花の季節に師を偲び、希望に満ちた一步を踏み出してゆけ！ との熱き慈愛の境涯の響きを、私は受け止めた。

私は、この師の心を深く知るゆえに、折にふれ、創価の城に桜を植樹し、荘厳してきた。御聖訓には、「**仏というものは私たちの心の中におられます。たとえば、桜の花は趣のあるものですが、木の中から咲き出でるようなものです**」(全1491・新2036、趣意)と仰せである。ここには、ありがたき深い深い生命哲学が、爛漫の桜に香風が吹きわたるように、説き明かされている。**桜の生命と同じように、我々も力の限り、生きて、生きて、生き抜いて、己の使命の花を咲き薫らせていくことだ。これが本然の法則だ。**

日本中、いな世界中の尊き同志たちが、師弟不二の心を心として、偉大なる広宣流布へと、晴れ晴れと大行進しゆくなか、我らにとって光線が輝きわたるような四月二日を迎えようとしている。

我らに春が来た！ 勝利の春が来た！ 創価の同志の春が来た！

今年(=2007年)の四月二日は、戸田先生の五十回忌である。